

室蘭工業大学-学報

NO.678



室蘭工業大学とNPO法人 ten to ten（北海道室蘭）が「アイヌ伝承植物ノブキクッキー」を共同開発
(35ページに関連記事あり)

2026年 4月号

目次

◇ SPRING奨学生だより ◇

GlobalNet Workshop 2025	1
トップオブトップアカデミー	5
未来の博士フェス2025	17

◇ トピックス ◇

HOKUSHIN-1 衛星、フライトモデル開発完了 - JAXA J-CUBEプログラムの支援の下、 2026年春以降に打ち上げ、宇宙実証へ	20
みらい共創会議を開催	23
泉 佑太准教授が道新室蘭政経文化懇話会において講演を行う	24
本学の研究グループの論文が国際学術誌『RSC Mechanochemistry』の表紙 (Front Cover) に選出	25
教員の業績評価システム (ESTA2025) における優秀教員表彰式を開催	27
パブリックリレーションズオフィスニュースレター第6号を発行	28
本学学部生の論文が国際雑誌に掲載	29
本学学生がThe 2025 IEEE Sapporo Section Student Paper Contest Encouraging Prizeを受賞	30
本学学生が令和8年度日本機械学会知能・情報・精密機器部門講演会において 若手優秀講演フェロー賞を受賞	31
大和工業株式会社とネーミングライツ事業実施契約を締結	32
令和7年度異分野融合セミナーを開催	34
アイヌ伝承植物ノブキクッキーの販売開始 - 白糠アイヌに親しまれてきた 伝承植物「ノブキ」と道内産の食材を、5色のクッキーに -	35
国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部との包括連携協定に関する打ち合わせを実施	37
室蘭ビジネスコンテスト 最終審査会を開催	38
室蘭工業大学公認サークルSARDが自作エンジン搭載ロケット「宙の芽」の 打ち上げに成功	39
ABC国際学会を開催	42
第2回鹿サミット - 自然と響き合う - を開催	44
第5回クリエイティブコラボレーションセンターワークショップ&第2回プレタスク フォース ワークショップとYomo-Yamaノ宴を開催	47

◇ 情報・資料 ◇

MONOづくりみらい共創機構「プレ共同研究」(6回目)の採択	49
--------------------------------------	----

◇ 外部資金 ◇

民間等との共同研究の受入れ	50
奨学寄附金の受入れ	51

◇ 人 事 ◇

人事異動	52
訃報	62

◇ 会 議 ◇

学内各種委員会等の開催	63
-------------	----

◇ 日 誌 ◇

学内行事・学外行事	64
-----------	----

◇ 人物図鑑 ◇

室蘭工業大学人物図鑑 part.45～46	65
-----------------------	----

GlobalNet Workshop 2025 Autumn 参加報告書

博士後期課程3年 WANG YIMENG
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年9月7日、次世代研究者挑戦的研究プログラムのメンバーとして、岡山市で開催されたGlobalNet Workshop (GNW) 2025 Autumnに参加いたしました。GNW 2025 Autumnは電子情報通信学会IEICE国際委員会の企画により開催され、留学生と日本人学生・研究者との国際的な交流を促進することを目的としています。本報告書では、フラッシュプレゼンテーション及びポスターセッション、懇親会の3つの活動を中心に報告いたします。

2. フラッシュプレゼンテーション及びポスターセッション

IEICE会長の挨拶およびGNWスポンサーであるLabBases社の講演の後、参加者はそれぞれ1分間の英語によるライトニングトークを行いました。トーク内容は、自己紹介とポスターの概要説明という二部構成となっており、各発表者が限られた時間内に研究の魅力を簡潔に伝えました。後半のポスターセッションは2グループに分かれて行われ、それぞれ45分間の展示時間が設けられました。

私の発表は、過去2年半にわたる研究成果をまとめたもので、題目は“Enhancement of Underwater Acoustic Streaming Generated by Ultrasonic Transducer”でした。本研究では、異なる周波数において、さまざまな材料で構成



写真1 ポスターセッションの様子1

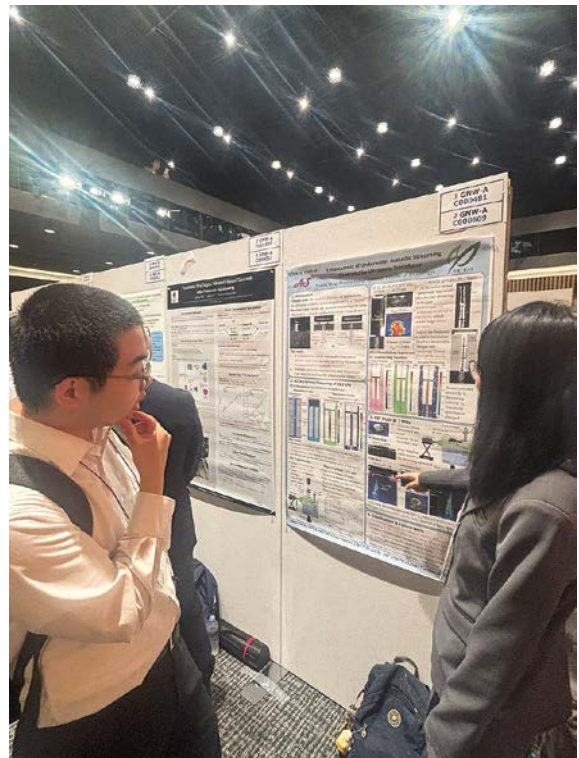


写真2 ポスターセッションの様子2

された穴付き円柱構造が、特定の寸法条件下で水中音響流の流速に与える影響を評価・比較しました。材料の選定や幾何学的設計が音響流の増強に与える効果について議論し、超音波トランスデューサを用いた応用の効率を高める可能性についても言及しました。

自分のポスター発表の合間には、他の参加者の発表にも積極的に耳を傾けました。今回の参加者の多くは、インターネット情報や通信ネットワーク、AI技術などの分野を専門としており、私の研究分野とは直接的な関連は少なかったため、専門的な助言を得る機会は限られていました。しかしながら、異なる研究アプローチや視点に触れることができたことで、自身の研究をより広い観点から見直すきっかけとなり、大いに刺激を受けました。

3. 懇親会

全ての会議プログラム終了後、IEICEのスポンサーによって、岡山城内にて懇親会開催され、同時にベストスピーチ賞の発表も行われました。惜しくも受賞とはなりませんが、会場で提供された美味しい食事は、1日の疲れを癒してくれるものでした。交流招待会では、同じ大学からの参加者と再会して親交を深めることができたほか、私の発表を聴講してくださったDocomo社の技術者の方々ともさらに具体的な研究内容について意見交換を行うことができました。

また、岡山城という歴史的な場所での開催ということもあり、交流会後には城内を見学する機会にも恵まれました。日本の歴史についての理解を深めるとともに、城外から望む美しい景色も堪能でき、心身ともに充実した時間となりました。本イベントを開催して下さった関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

4. 結びに

「GlobalNet Workshop 2025 Autumn」への参加は、私にとって極めて貴重な経験となりました。フラッシュプレゼンテーションでは国際的な視野の広がりを実感し、ポスターセッションでは実践的な研究交流を通じて多くの刺激を受けました。今後もこのような機会を積極的に活用し、研究の質を高めていきたいと考えております。

また、本イベントへの参加を「キャリア育成支援プログラム」として渡航費をご支援いただいた「次世代研究者挑戦的研究プログラム」に、心より御礼申し上げます。さらに、電子情報通信学会総合大会において、GNW2025Autumnへの参加を特別に許可して下さり、ポスター作成に関しても丁寧にご指導くださった青柳指導教員に深く感謝申し上げます。

「Global Net Workshop (GNW) 2025」参加報告

室蘭工業大学大学院 博士後期課程 工学専攻1年
持続都市・交通学研究室 桐木 峻平
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年9月8日に岡山市北区天神町tenjin9 能楽堂にて行われた電子情報通信学会 (IEICE) 総合大会のイベント Global Net Workshop (GNW) 2025に、次世代研究者挑戦的研究プログラム生の一人として参加しました。GNW2025は、電子・通信分野を中心に、日本の学生・研究者と留学生との交流を目的として企画されたものであり、参加者によるポスターセッションを中心に据え、フラッシュプレゼンテーションやGNWスポンサー講演、さらにはInternational Reception Party (懇親会) といった多彩なプログラムで構成されています。

2. プログラム内容

当日は開会挨拶の後、GNWスポンサーであるLabBases社による講演を挟み、前半はフラッシュプレゼンテーション、後半は2部交代制のポスターセッションが行われました。

フラッシュプレゼンテーションでは、参加者が30秒間で自己紹介と研究概要を英語で発表し、国籍・大学・研究内容が多様であることから、国際的かつ学際的な場であることを実感しました。ポスターセッションは2部交代制で、各45分の持ち時間で実施され、電子・通信分野が中心のなか、私は個別化された人流データを活用した都市計画分野の研究を紹介し、異分野的な視点を示す発表となりました。発表中は、参加者と活発な議論を行い、AIを用いた生活者支援や都市設計への応用など、具体的な活用可能性について意見交換ができました。普段は同じ分野の人が多く集う学会発表が中心ですが、今回のように異分野の参加者が集う場では、自身の研究内容を分かりやすく伝える貴重な経験となり、異分野間の交流の意義も改めて認識できました。



写真1 フラッシュプレゼンテーションの様子
日本人トップバッターで緊張しました…



写真2 ポスターセッションの様子
とてもユニークな会場でした

3. International Reception Party (懇親会)

ポスターセッションの終了後、懇親会は会場を岡山城の天守閣に移して開催され、非常に斬新な体験となりました。同じ大学から参加した異分野の学生や他大学の参加者と交流し、研究内容や大学生活について意見交換することで、国際的かつ学際的なネットワークを広げる貴重な機会となりました。



写真3 懇親会の料理

4. おわりに

GNW2025ではフラッシュプレゼンテーションおよびポスターセッションにて、国内では貴重な英語での発表の機会を得ることができました。今後もこのような機会を積極的に活用し、学際的な視点を広げるとともに、国際的な場での発信力を養っていきたいと考えております。また、後輩にもこのような場への参加を勧め、自らの視野を広げてもらいたいと思います。最後に、GNW2025の参加にあたり、次世代研究者挑戦的研究プログラムによる「キャリア開発・育成コンテンツ」としての旅費支援に心より感謝申し上げます。

トップオブトップアカデミー2025

博士後期課程2年 WEN LIHONG
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

「次世代研究者挑戦的研究プログラム」のキャリア開発・育成コンテンツの一環として「トップオブトップアカデミー2025」に参加し、2025年10月7～9日にサウジアラビアのKAUSTで開催された「THE World Academic Summit 2025」に出席しました。本サミットはTimes Higher Educationが主催し、公式テーマは「大学は社会進歩の推進主体」です。



写真1 メインホール



写真2 交換会場



写真3 デイナーメイン会場

2. 会議での学び

KAUSTの会場はプロフェッショナルで、運営も行き届いていました。主会場の講演はほぼすべて聴講しました。なかでも印象的だったのはDana Al-Sulaiman教授のセッションです。ご自身の経験を交え、女性が次の科学イノベーションの波を牽引する意義を語り、ロールモデルの可視化と、メンタリングネットワーク・学際コミュニティ・柔軟な評価・家族配慮などの制度的支援を両輪とする重要性を強調されました。率直で力強いメッセージに強く励まされ、温めていたアイデアを行動に移す勇気が湧きました。コーヒープレイクでも交流は活発で、複数の参加者と連絡先を交換し、今後の協働の可能性について意見交換できました。



写真4 コーヒープレイク



写真5 Dana Al-Sulaiman 教授



写真6 会議後の交流

3. 会議イベントと都市の印象

10月8日、Gala Dinnerに参加しました。ディナーや会場のコーヒープレイクには現地ならではの風味が色濃く、スパイスを効かせた前菜や温菜、アラビアコーヒーとデザートが印象的でした。その合間にCampus Tourにも参加し、

KAUST の海沿いのキャンパスと研究施設を間近に見学しました。



写真7 グルメ料理



写真8 Campus Tour



写真9 地元の伝統舞踊

会議後はジェッダ (Jeddah) に移動し、海上のモスク (Floating Mosque) を参観、紅海の海岸線を散策して、イスラム文化と海洋環境が交わる都市の気質を肌で感じました。飲食面では、葛西さんの勧めでALBAIKのハンバーガーを試したところ、とても好みに合い、思わず二食続けていただきました(笑)。あわせて宗教的作法にも留意し、モスク入場時は端正な服装を心がけ、女性はスカーフの着用が必要であることも学びました。



写真10 車内記念



写真11 海上モスク前・記念



写真12 ジェッダ記念

この一連の行程を通じて、学術会議の枠を超えて現地の人文と風景に幅広く触れることができ、視野が大きく開けました。これらの体験を、今後の学びや連携の原動力にしていきたいと思えます。



写真13 紅海沿岸



写真14 モスク



写真15 モスク記念

4. おわりに

今回のサウジアラビア (KAUST) 訪問は、国際的な視野と異文化コミュニケーション、学術発信力を高める貴重な機会でした。JST SPRINGのご支援により、この特別な地で最前線の交流に立てたことに心より感謝します。本経験を糧に、今後はより大きな舞台で研究の意義と価値を発信していきます。二年連続で参加できたことを光栄に思い、回を重ねるごとに充実度が増しました。日頃ご指導くださる太田先生・董先生に深く御礼申し上げますとともに、ぜひ多くの皆さんにも本プログラムへのエントリーをお勧めします。

THE World Academic Summit 2025 参加報告書

博士後期課程2年 葛西 芳枝
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年10月4日から12日にかけて、King Abdullah University of Science and Technology (KAUST) で開催された THE World Academic Summit 2025に、次世代研究者挑戦的研究プログラム生の一人として参加しました。サミットのテーマは「Universities as agents of change (大学は変革の担い手)」であり、基調講演、パネルディスカッション、分科セッション、ネットワーキングを通じて、研究・教育・産官連携・社会実装の最前線が議論されました。本報告書では、サミットや渡航中の交流から得た学びについて報告します。

2. THE World Academic Summit 2025での学び

3日間のサミットでは、パネルディスカッションを中心に、イノベーション創出、起業・産業化、地域協働、都市の健康・サステナビリティ、AI時代の知の再定義、女性の活躍など多様なテーマが扱われました。特に、大学の今後のビジョンと戦略に関するセッションと大学主導のイノベーションと起業家精神に関するセッションが印象的でした。セッションでは、高等教育への信頼低下や学位価値への疑念が指摘され、その背景として、卒業生のスキルと雇用需要の不一致、地域社会との接点の希薄化、研究成果の社会インパクト不足等の課題が挙げられました。これに対し、大学は、外向きの視点を最優先に据え、奉仕すべきコミュニティのニーズ(地域課題)を起点に、ミッション・資源配分・評価の再設計を行う必要があることが述べられました。教育面では、講義中心から体験型学習へ重心を移し、カリキュラムの一部を、教員と外部の人が学習成果を共同設計し実課題に充てることが提案されていました。また、地域課題解決と社会的インパクトに向けて、産学官連携とアントレプレナーシップの強化が不可欠であると示されました。

私自身、起業を見据えた事業づくりの一環として研究を位置付けており、企業の課題を学生が解くプログラムを運営しています。単なる就業体験ではなく、課題設定と成果の可視化に重きを置く点が、サミットで示された方向性と重なると感じました。今回の二つのセッションを通じ、世界の大学や登壇者が社会連携と教育変革をどのように具体化しているか



写真1 基調講演の様子



写真2 パネルディスカッションの様子

をさらに深掘りし、カリキュラム設計や連携スキームの改善へ反映していきたいと感じました。

3. 本訪問における交流での学び

渡航中に最も強く感じたのは言語習得の重要性です。私はTop of topアカデミーへの応募を機に英語学習を開始しましたが、現地では発言内容の理解が十分に及ばず、英語で積極的に交流する他の学生の姿に圧倒されました。KAUSTの先生方との情報交換や参加者との対話の場面では、共通言語を持たない不自由さと、翻訳機に依存する限界を痛感しました。翻訳機を介しても内容は興味深かったですが、ニュアンスをその場で掴み、自ら意見交換したいという思いが強く、言語の壁によって情報の大半を取りこぼしている感覚になりました。そのような中、董先生・太田先生から助言を受け、拙い英語ながらも自分から声をかける姿勢を持てたことは収穫であったと感じています。英語学習の必要性を改めて認識するとともに、まずは自分から一言目を出す行動の重要性を体験的に学びました。

渡航期間中は、他大学の方との交流だけでなく、次世代研究者挑戦的研究プログラム生同士の交流も活発でした。同じ大学の博士学生同士が継続的に関われる環境の中で、互いの研究内容や将来について意見交換し、良好な関係性を築けたことも大きな収穫となりました。



写真3 交流会の様子



写真4 サミット参加者と交流している様子

4. おわりに

今回、THE World Academic Summit 2025に参加し、日常では得難い貴重な経験を重ねることができました。企画・引率してくださった董先生、太田先生、ならびに次世代研究者挑戦的研究プログラムの支援に深く感謝申し上げます。

サミット期間中は、世界のトップ研究者・リーダーの講演を直接拝聴し、交流の機会にも恵まれ、大きな刺激を受けました。現地の学生との対話を通じて、英語が当たり前に行われる環境や研究に関する最新情報に触れ、多方面で学びの幅が広がりました。本訪問で得た知見とネットワークを、今後の研究の深化と地域連携の実装に着実につなげていきます。



写真5 会場へ移動する様子



写真6 集合写真

THE World Academic Summit 2025 の参加と KAUST での研究室訪問

博士後期課程 2 年 幾島 晴輝
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年10月7日～9日の3日間にわたり、サウジアラビアのアブドラ王立科学技術大学 (KAUST) で開催された「THE World Academic Summit 2025」への参加および KAUSTでの研究室訪問を、次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける「キャリア開発・育成コンテンツ」の一環として行ってきました。本イベントでは「進歩の担い手としての大学」を全体テーマとして、大学や産業界、政策立案者の世界的リーダーが一堂に会し、大学が地域社会や国際社会において前向きな変化を生み出す「推進力」として機能するために、三者がいかに連携・協力すべきか、その具体的な方策についての議論が行われました。

2. KAUSTでの研究室訪問

イベント前日である10月6日には会場であるKAUSTの3つの研究室を訪問させていただきました。中でも化学を専門とするSanjay Rastogi教授の研究室を訪問したことが最も印象に残っています。Sanjay教授は、大学での基礎的な研究だけでなく、帝人グループの会社でも働き「Endumax」という市場最強の商用テープという実用品の開発にも携わっていたことを教えてくださいました。大学での基礎的な研究は、最終的に実生活を豊かにするための土台であり、そのゴールを意識しながら研究をすることが重要です。機能性豊かな材料を作るために、プラスチックを構成する分子の構造や配列をナノレベルで解明し制御するという、社会貢献への強い意志と深い科学的探究心のどちらが欠けてもいけないということを学びました。また、博士後期課程3年のMrudulさんが実験室を案内してくださり、普段目にしない大型の合成装置や分析装置に触れることができました。



写真1. Sanjay教授との集合写真



写真2. Mrudulさんとの写真

3. THE World Academic Summit 2025

私は、本イベントの議論を通じて、「進歩の担い手としての大学」が、激変する世界において積極的な変化を生み出す「推進力」となるために、教育、研究、そして社会連携の各分野で具体的にどのような変革を推進すべきかについて深く学びました。

ここでは、大学における「未来に対応した人材育成への転換」について報告します。大学の最大の貢献は「人」を輩出することであり、その教育を根本から見直されなければならないという点を学びました。特に重要なのは、AIが代替しにくい批判的思考や分析、効果的なコミュニケーション、リーダーシップなどの「パワー・スキル」を重視することです。AIは素晴らしい「仲間」として教育に活用されるべきですが、学生にはAIに入力するデータの管理や、出力された回答を分析する方法を訓練し、AIを使いこなす能力が求められます。また、物理的な世界での活動の習熟能力（配管工や電気技師の仕事など）は、AI駆動型ロボットには依然難しく、学校教育で軽視すべきではない、という示唆に富んだ視点も得られました。

また、教育方法に関しては講義中心から、現実世界の複雑な課題を解決する経験を提供する**体験型学習**や**チャレンジベース学習**へ、カリキュラムは**学際的な統合**へと移行する必要があると結論づけられました。さらに、大学は卒業後の社会人に対するリスキリングやアップスキリングの必要性に応えるため、**生涯学習（四次教育）のハブ**としての役割を担うことにより、地域社会に技術を還元し、積極的な発展への「推進力」として機能することが述べられていました。



写真3. 開会式の様子



写真4. Jeddahの夜景

4. おわりに

本イベントでは、貴重なお話を聞いたり、日本では出会えない人々と繋がったりすることができました。また、日本とは全く異なる中東の価値観や文化、自然を肌で感じました。特に、雲がないため毎晩綺麗な月が見られたことが最も心に残っています。本イベントの参加に際して次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける「キャリア開発・育成コンテンツ」として旅費を支援していただきましたこと心より感謝申し上げます。

トップオブトップアカデミー2025 (サウジアラビア) 参加報告書

博士後期課程1年 桐木 峻平
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

次世代研究者挑戦的研究プログラムの「キャリア開発・育成コンテンツ」の一環として、2025年10月6日～9日の4日間にわたり、サウジアラビアのキング・アブドゥッラー科学技術大学（以下、KAUST）で開催された「The World Academic Summit 2025」に参加しました。本サミットは、世界各国の大学トップや研究者が一堂に会し、「Universities as Agents of Change? Agents of Progress? (大学は、社会を変える存在なのか？社会を前進させる原動力たりうるか?)」という根源的な問いのもと、大学に求められる新たな社会的役割、およびAI時代における研究と教育の将来像について活発な議論が交わされました。また、KAUSTに在籍する羽瀨教授のご厚意により、都市計画・都市デザインを専門とするSami准教授や研究室の学生との交流の機会も得ました。本報告書では、サミットおよびKAUSTでの交流を通じて得た知見について報告します。



写真1：オープニングセレモニーの様子



写真2：集合写真

2. 大学の社会的役割の再定義—サミットで得られた知見①

「大学での学びが実社会でいかに貢献するか」という問いは、もはや学生個人のレベルにとどまらず、世界中の大学に突き付けられた課題となっています。実際、近年では大学への信頼や学位の社会的価値に対する認識が低下しており、たとえばアメリカでは、大学への信頼度が過去10年間で56%から37%に急落したとの報告もあります。同時にサミットでは、大学は依然としてメディアや政治よりもはるかに信頼されている機関であり、社会課題の解決主体として強く期待されているという現実も強調されました。今後の大学には、教育と研究を通じて社会にいかなるインパクトを創出するかが求められています。特に印象的だったのは、大学が中立的な立場からいわば“価格タグのないマッキンゼー”として政府や社会に専門的知見を提言することが、これからの大学の重要な価値の一つとなるという議論です。社会の信頼を取り戻し、真に社会を前進させる大学となるために、大学の存在意義そのものが問われていると感じました。

3. AI時代における学び—サミットで得られた知見②

現代社会における最重要技術の一つであるAIについてSchmidhuber氏の講演は極めて示唆的でした。Schmidhuber氏は、現在のAIの基本は1600年代の数学に基づいた非常にシンプルなものであり、コンピュータが安価かつ高性能になったことで、うまく機能するようになっただけと述べました。さらに、AIは膨大なデータを学習することで、新薬や新素材を予測する人工科学者として機能しており、科学研究の一部を担い始めていることにも触れていました。また、真のAIとは人間によって設定された目標を盲目的に遂行するのではなく、自ら目標を設定し、探求するAIであるとし、このようなAIが数年以内に登場する可能性を示唆しました。

このような急進的なAI時代に私たちが学ぶべきこととは何か—サミットで示された方向性は明確でした。第一に、AIによる代替が困難な「Power Skills」—批判的思考力、リーダーシップ、協調性、倫理的判断力を磨くことの重要性です。AIに「何をさせるか」「それは倫理的に妥当か」を判断するのは人間であり、AIを適切に統御する知的能力こそが、AI時代の必須教養といえます。第二に、AIが未だ代替できない「Physical Skills」の価値です。AIはチェスや文書要約といった「スクリーンの裏側」の知的作業には長けていますが、現実世界での不確実で創造的な手作業をこなすロボットはまだ存在しないと対比的に強調されていました。こうしたAIが代替できないスキルは、今後さらに高い社会的・経済的価値をもつと予想されています。AIへの過度な依存によって思考力が低下する（＝認知的負債）を避け、思考を深めるためのツールとして活用しながらスキルを鍛えること、それが、AI時代を生きる研究者・学生に求められる新たな学びの姿勢だと感じました。



写真3：Schmidhuber氏と

4. KAUSTでの研究交流を通じて得られた気づき

KAUST滞在中、都市計画・都市デザインを専門とするSami准教授の研究室を訪問し、「乾燥地帯の洪水」と「ウォーカビリティ」をテーマとする博士学生らと研究交流を行いました。対象や手法は異なるものの、いずれの研究も限られたデータ環境をどう乗り越えるかという共通の課題に挑んでいました。

洪水研究の学生は、気候変動に伴う突発的豪雨の解析において、高解像度の地形・土地利用データが不足しているという制約に直面していました。これに対し、機械学習を活用して衛星画像から独自の土地利用マップを生成する手法を模索していました。一方、ウォーカビリティ研究の学生は、「歩きやすさ」という新しい社会的価値を把握するためのデータが乏しい中、自ら歩行環境を記録・評価するフィールドワークを展開していました。このように、両者はデータの欠如を障壁ではなく創造のチャンスと捉え、課題に挑む姿勢を体現しており、強く印象に残りました。



写真4：Sami准教授と



写真5：研究交流

5. おわりに

本サミットおよびKAUSTでの交流を通じて、貴重な知見と多くの刺激を得ました。世界各国の研究者・学生と意見を交わす中で、国際的な視野を広げるとともに、英語での発信力を高める良い機会となりました。初めての中東訪問でもあり、文化や都市空間の違いを肌で感じることで、日本の良さや課題を俯瞰的に見つめ直すことができました。本サミットへの参加に際し、次世代研究者挑戦的研究プログラムの「キャリア開発・育成コンテンツ」としてご支援を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。また、ご指導くださった董先生、太田先生、そして今回の参加をともにしたWenさん、西山さん、葛西さん、幾島さんにも心より御礼申し上げます。異なる専門分野をもつ仲間との対話は、多角的な視点を得るうえで非常に有意義でした。今後も国際的な場に積極的に参加し、得られた経験と学びを後輩たちにも還元していきたいと思います。



写真6：モスクでの記念撮影



写真7：KAUSTの夜景

The World Academic Summit 2025参加報告

室蘭工業大学 大学院博士後期課程 工学専攻 先端情報電子工学コース 2年
高圧電子物性研究室 西山 紗恵
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

はじめに

2025年10月4日から12日にかけて、次世代研究者挑戦的研究プログラム選抜学生5名および教員2名の一員として、サウジアラビア王国を訪問しました。目的は、アブドラ国王科学技術大学（KAUST）で開催された「The World Academic Summit 2025」への参加です。私にとって今回は人生初の海外渡航であり、立候補の際に掲げた「対面交流による学術活動の深化」と「国際的な視点でのキャリア形成」を具体化するための、大きな挑戦の機会となりました。本サミットは、高等教育機関が社会や経済の発展にどのような役割を果たすべきかを議論する場であり、私たちは日本の次世代研究者として、その最前線の議論を直接体感するために参加しました。

KAUST の特殊な研究環境

サミットの会場となったKAUSTの生い立ちと環境は非常に特異なものでした。2009年に開校したこの大学院大学は、前国王の強力なリーダーシップのもと、建設計画から開校まで極めてスピーディーに進められたものです。キャンパス内にはスーパーマーケットや飲食チェーン、さらには保育施設から高校までが完備されており、広大な敷地そのものが一つの町のように機能していました。研究者が生活の細事に煩わされることなく、持続的に研究に没頭できるよう配慮されたこの環境には、学術に対する敬意と豊かさを感じさせられました。また、多様性についても徹底されており、生物学やコ



(a)



(b)



(c)



(d)

すべてKAUST構内で撮影したもの。(a)紅海沿いのモニュメントにて、同行した葛西さん・WENさんとの集合写真。(b)(c)スーパーにてそれぞれ、積まれたパスマティライスとフルーツ。(d)モスクの入口にて。

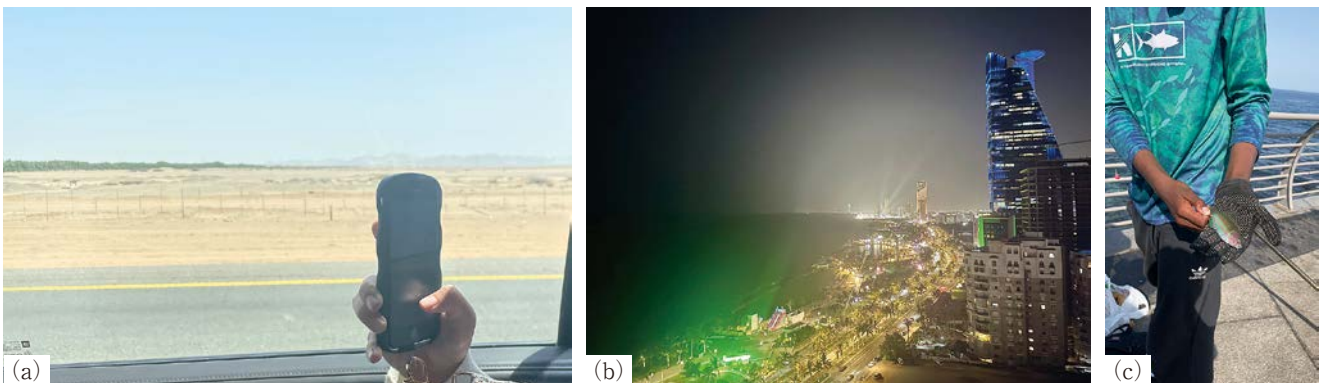
ンピューター科学、物理科学の学術部門を柱として学際的な研究活動が日々おこなわれているほか、KAUSTには世界中から様々なルーツを持つ人々が集まっています。入構に際しては厳重な事前申請が必要でしたが、その内側には自由で活発な知の交流が広がっていました。

サウジアラビアの地と人々に触れて

サウジアラビアには紅海と広大な砂地に囲まれた未知の風景が広がっていました。都市間の移動では、果てしなく続く平坦な砂地の中を真っ直ぐな道路が貫いており、そのスケールの大きさは日本に多い山間部の風景とは対照的で、中東の地の広大さを実感させられました。

イスラム教の伝統的な装いに身を包んだ人々が行き交う姿に私たちは圧倒される思いでしたが、現地の方々には非常に暖かく接していただきました。2019年に観光客の受け入れを本格化したばかりの国ですが、今回、eVISAの申請が即座に認められたことに日本への高い信頼を感じ、またホテルや店舗のスタッフ、Uberのドライバーに至るまで、笑顔で我々を迎え入れてくれたことが強く印象に残っています。

空港のあるジェッダの街は、特に夜に活気があり、22時を過ぎても、女性や子供を含む多くの人々で賑わっていました。紅海沿いの公園や「JEDDAH」のモニュメント周辺は、日本の休日の昼間のようにありました。夕食のために訪れた現地のハンバーガーチェーン「ALBAIK」も賑わいがあり、治安の良さや人々のエネルギーを同時に感じることができました。また、最終日に訪れたモールでは、昼過ぎまで廃墟のように静まり返っていた空間が、14時を過ぎた途端に楽しい喧騒に包まれるという、現地のライフタイムのダイナミズムに驚かされました。



- (a) サウジアラビアの都市間を結ぶ幹線道路。広大な砂地にまっすぐ車道がひかれていた。
 (b) 活気あふれる夜のジッダ市内。紅海に隣接して人々の生活エリアがある。
 (c) 波しぶきが届くほど海が近い、紅海沿いのプロムナードにて。多数の釣り人がおり、ちょうど釣れた魚を見せてくれた。

学術的な交流

サミット期間中、KAUSTの羽瀧聡史教授のご協力により、コンピュータサイエンスや化学工学、都市システムを専門とする3名の教授陣と個別のミーティングを行うことができました。それぞれの専門分野に関連した研究紹介や意見交換を行い、学生の中には共同研究へ向けた具体的な足がかりを得た者もいました。

サミット本編の議論では、技術の社会実装や高等教育を受けた人材の育成について大学が産業と密に連携して進めていく必要性について強調されていました。この課題は世界も日本も共通して直面しているものであると実感しました。また、AIの役割についても、単なる授業の代替ではなく、適切な活用方法を学生に教育すべきという議論があり、自身の研究活動におけるツールの活用法を見直す良いきっかけとなりました。

慣れない英語での議論やレセプションでの社交には大変な疲労を伴いましたが、交流してくれた参加者の多くは、アジアから来た我々に関心を持ち、積極的に対話してくれました。本プログラムの立候補時に望んでいた「対面での密な交流」が叶いました。



(a) サミットでのパネルディスカッションの様子。(b) 現地で交流した方々との記念撮影。

おわりに

初めての海外渡航で、これほどまでに刺激的な機会を得られたことは、私の人生において最も貴重な機会となりました。英語でのコミュニケーションの難しさとバックグラウンドの全く異なる人々との交流することの楽しさを肌で感じ、そして世界のトップリーダーたちが描く高等教育がもたらす社会変革のビジョンについて直接お話を聞くことができました。次世代研究者挑戦的研究プログラムを通じて旅費のご支援をいただいたことに、心より感謝申し上げます。今回の経験を通じて、国を挙げて技術を創り出そうとする圧倒的な熱量を体感しました。この大きな刺激を自身の研究の深化に活かすとともに、後輩たちにもぜひ体験してほしいと思っています。

未来の博士フェス 2025 参加報告

博士後期課程1年 小笠原 日向子
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. 開催概要

2025年9月4日(木)9:00~18:00、東京都千代田区の一橋講堂において開催された「未来の博士フェス 2025」に参加しました。本イベントでは、全国から集まった学生による登壇発表やポスター発表が行われ、さらに企業・研究機関による「就職支援イベント」も併せて開催されました。

2. 学生交流と学び

ポスターセッションや懇談の場では、自身の研究内容について他大学の学生や研究者に紹介する機会があり、「面白い」と評価していただいたことは大きな励みとなりました。また、発表が非常に上手な学生のセッションを拝見し、プレゼンテーション技術や伝え方について多くを学ぶことができました。パネルディスカッションでは、博士人材が産業界で求められている現状や、研究政策に関する社会的な議論を聞くことができ、博士取得後のキャリア形成に関する理解を深めることができました。さらに、実際に博士号取得者が企業に就職した経験談を聞くことで、具体的なキャリアパスの参考になりました。

3. 終わりに

私は「次世代研究者挑戦的研究プログラム(次世代プログラム)」の支援を受ける選抜学生として、本イベントに参加しました。本参加はキャリア開発コンテンツの一環として位置付けられており、自身の研究活動やキャリア形成を見つめ直す貴重な機会となりました。支援によって得られている研究環境のありがたさを改めて実感するとともに、今後も主体的かつ挑戦的に研究に取り組んでいく決意を新たにしました。今回の参加を通じて、より幅広い場で自身の研究の意義と価値を発信していきたいという思いを強くしました。また、同様の機会があれば積極的に参加し、学びを深めたいと考えています。

最後に、本イベントの運営にご尽力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

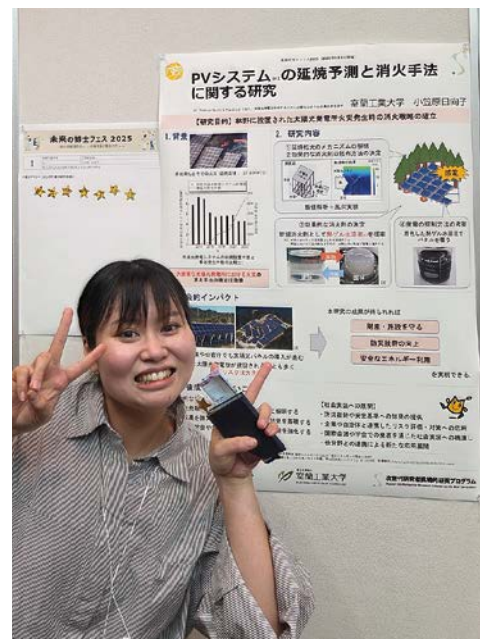


写真1 ポスター発表の様子

未来の博士フェス2025 参加報告

室蘭工業大学大学院 博士後期課程 工学専攻先端環境創生工学コース2年
生化学研究室 張 恒
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年9月4日、一橋大学にて開催された「未来の博士フェス2025」に参加し、ポスター発表を行いました。本イベントは、次世代研究者挑戦的研究プログラムにおけるキャリア開発コンテンツの一環として位置付けられており、企業と協力して、博士課程学生を応援するイベントです。産業界、アカデミア、官公庁など多様な立場から、博士人材の価値と可能性を共有・発信し、博士人材がより多様なフィールドでの活躍の可能性を広げていくことを目的としています。

2. ショートプレゼンテーション&企業ピッチコンテスト

始めのセッションでは、博士課程学生による5分間のショートプレゼンテーションとして、自己紹介と研究内容について発表を行いました。短時間でインパクトのあるプレゼンテーションが視聴し、論理的思考力と表現力が向上したと感じました。

その後、博士を大事にする企業ピッチコンテストが行われ、参加した6社がわずか1分という短い時間の中で、それぞれ就職待遇、人材育成、キャリア支援など様々な面から博士人材を重視していることを強調しました。このことから、現在の社会において、博士人材の問題解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力がますます重視されていることが実感しました。

3. パネルディスカッション

続いて、「課題を見抜き、未来を拓く～博士人材が社会を動かす～」をテーマにパネルディスカッションが行われました。文部科学省高等教育局大学振興課の竝木茂朗氏をファシリテーターに、6名のパネリストとともに博士人材がどうやって社会を動かすかについて意見を交わしました。パネリストたちは異なる分野で活動しており、自身の人生経験から教訓をまとめ、得られた知見を共有した上で、博士課程学生が在学中に身につけるべき能力や、社会に出る際に準備しておくべきことを教えてくれて、非常に貴重な経験共有の場となりました。私はこの機会から多くの学びを得ることができ、大変有益でした。

4. ポスターセッション

最後に、ポスターセッションは2部交代制で行われました。発表時間は40分交代で、さらに10分間のフリートークの時間を設けられました。前半の時間では、全国各地から集まった学生たちと交流し、多くの異なる分野について知ることができました。また、交流を通じて各分野で現在注目されている方向性や課題も理解することができ、今後の自身の進



写真1. ポスター発表の記念撮影

路を考える上で大いに参考になりました。

後半の時間では、私は発表者として、参加者からの質問を受けました。皆が異なる専門分野であったため、私にとって非常に新鮮な視点からの質問が多く、とても勉強になりました。また、この機会を通じて多くの友人もでき、私にとって非常に意義深い交流発表会となりました。

5. おわりに

本イベントを通じて、多くの学びと貴重な経験を得ることができました。特に、パネルディスカッションでは各パネリストの知見や経験を通じて、博士課程在学中に身につけるべき能力や社会に出る際の準備について理解を深めることができました。

さらに、ポスターセッションでの交流や質問対応を通じて、自身の視野を広げるとともに、新しい友人を得ることができ、博士人材としての成長や今後の研究活動・キャリア形成において大きな糧となるものであり、非常に意義深いイベントであったと考えています。今回未来の博士フェス 2025 への参加に際して、次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける「キャリア開発コンテンツ」として旅費を支援していただいたことに心より感謝申し上げます。今後もこのようなイベントに参加したいと考えております。

トピックス

HOKUSHIN-1 衛星、フライトモデル開発完了 —JAXA J-CUBEプログラムの支援の下、 2026年春以降に打ち上げ、宇宙実証へ—

《発表のポイント》

- 東北大学、北海道大学、室蘭工業大学が共同で開発を進めてきた超小型人工衛星「HOKUSHIN-1（ほくしんわん）」は、フライトモデルの開発および打ち上げ機関への引き渡しを完了し、2026年春以降に打ち上げを予定しています。
- 数kg級の超小型衛星は、深宇宙探査ミッションに挑戦する時代になりました。HOKUSHIN-1は、深宇宙探査に必要な技術を高度約400kmの地球周回軌道で実施します。
- 2021年度J-CUBEプログラム^(注1)に採択され、2022年に開発を本格始動した本プロジェクトは、三大学の学生が実機開発から環境試験まで主体的に参画し、実践的な教育・研究を進めてきました。
- 打ち上げ後の衛星運用は、東北大学グリーン未来創造機構スペースクロスステック研究センター^(注2)が中核となって行う予定です。

《概要》

東北大学、北海道大学、室蘭工業大学が共同で開発を進めてきた超小型人工衛星「HOKUSHIN-1」は、このたびフライトモデル（図1、図2）の開発を完了し、打ち上げ機関への引き渡しを終えました。打ち上げは2026年春以降を予定しています。本衛星は、JAXAが実施する国際宇宙ステーション（ISS）「きぼう」日本実験棟からの超小型衛星放出機会提供プログラム「J-CUBE」において2021年度に採択されたプロジェクトで、2022年6月に開発を本格始動し、フライトモデルの完成に至りました。

将来、月以遠へと活動領域を拡張することを見据えた技術実証衛星の第一弾であり、深宇宙探査ミッションに不可欠な基盤技術の実証実験を実施します。

《詳細な説明》

○研究の背景

HOKUSHIN-1は、東北大学、北海道大学、室蘭工業大学の三大学が連携して開発を進めてきた超小型人工衛

星です。

本衛星は、JAXAが実施する国際宇宙ステーション（ISS）「きぼう」日本実験棟からの超小型衛星放出機会提供プログラム「J-CUBE」において、2021年度に国内大学向け衛星として採択されました。これを受け、2022年6月には三大学共同による開発本格始動を発表し^(注3)、設計・試作・試験を重ねながらフライトモデルの開発を進めてきました。

HOKUSHIN-1は、数kgの超小型人工衛星が深宇宙へと活動領域を広げるための技術を、地球周回低軌道で実証することを目標としています。

○今回の取り組み

本プロジェクトでは、大学規模の設備・人員・開発費という制約の中で、深宇宙探査に必要な基盤技術を実機として統合することに挑戦しました。具体的には、大学地上局による軌道決定（測距）技術、コンパクトで高効率な推進装置、そして大電力発電を可能とする展開型太陽電池パネルの実装です。

軌道決定技術については、東北大学を中心に、衛星搭載機器と地上側機器の両面から開発と評価を進めました。試作品段階から通信実験を繰り返し実施し、限られた寸法や電力条件の中で最適な部品選定とソフトウェア調整を行いました。さらに、電波暗室試験を複数回実施することで、測距システム全体の性能を検証しました。

同時に、北海道大学が衛星全体の構造設計と解析を担当し、試作段階からフライトモデルに至るまで、設計の妥当性評価を重ねました。構造部品の設計・調達、複数回におよぶ組立・解体作業を通じて、実機としての完成度を高めていきました。

また、室蘭工業大学では、打ち上げ時の振動環境に耐えながら宇宙空間で確実に展開し、大電力を供給できる展開型太陽電池パネルの開発に取り組みました。高度な要求に応えるため、試作品の設計・製作と振動試験を繰り返し行い、その結果を反映しながら改良を重ねました。

なお、北海道大学および室蘭工業大学のHOKUSHIN-1の研究開発は、f³（エフキューブ）工学教

育研究センター^(注4)と連携して進められました。

これらの要素技術を統合したフライトモデルについては、三大学が連携し、振動試験や熱真空試験などの環境試験を実施しました。2025年2月にはすべての環境試験を完了し、同年7月にJAXA筑波宇宙センターにて衛星搭載ケースへの収納性確認を実施しました(図3)。複数の作業および審査書類の更新を経て、同年11月に打ち上げ機関への引き渡しが完了しました。

本プロジェクトでは、三大学の学生が実機開発と試験に主体的に参画しており、宇宙機開発の一連のプロセスを実体験する実践的な教育・研究活動としても大きな意義を有しています。

○今後の展開

HOKUSHIN-1は、国際宇宙ステーション (ISS) 補給ミッションに用いられる輸送機NG-24に搭載され、2026年春以降に打ち上げられる予定です。ISS到着後、宇宙飛行士の支援により、高度約400kmの地球周回円軌道へ放出されます。到着から放出までには数週間から数か月程度の待機期間を要する場合があります。

HOKUSHIN-1の運用は、東北大学グリーン未来創造機構スペースクロステック研究センターが中核となって実施します。本技術実証は、大学発の超小型衛星による将来的な深宇宙探査の実現に向けた重要な一歩となることが期待されます。

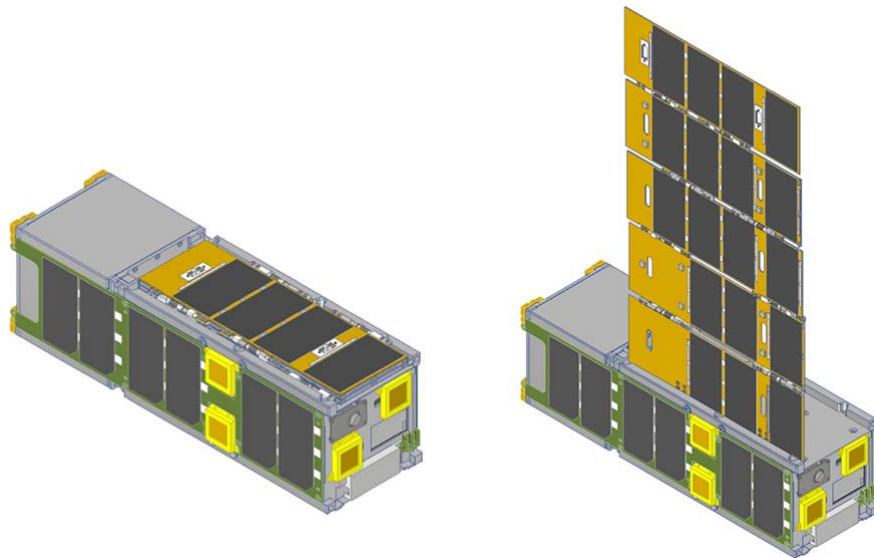


図1. 超小型人工衛星「HOKUSHIN-1」外観イメージCG
左：太陽電池パネル展開前（打ち上げ時）、右：太陽電池パネル展開後（宇宙放出後）

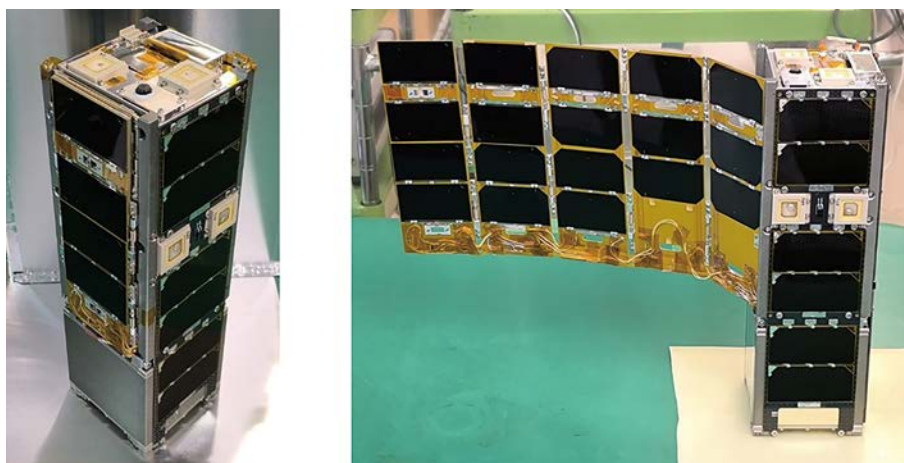


図2. 超小型人工衛星「HOKUSHIN-1」フライトモデル外観



図3. 開発メンバー（左：環境試験完了後、東北大学にて。右：JAXA筑波宇宙センターにて）

【用語説明】

注1：J-CUBEプログラム（Japan Manned Space Systems Corporation CubeSat Deployment Program）：JAXAが実施する、国際宇宙ステーション（ISS）「きぼう」日本実験棟からの超小型衛星放出機会を国内大学等に提供するプログラム。大学主体の超小型衛星開発を支援し、宇宙分野の人材育成と技術基盤の強化を目的としている。

注2：東北大学グリーン未来創造機構 スペースクロスステック研究センター：東北大学が2026年1月に設置した、宇宙技術の産学共創型研究開発拠点。サステナブルな宇宙活動の実現と宇宙経済の発展を目的に、小型宇宙システム、宇宙ロボティクス・探査、宇宙推進、宇宙通信などの先端宇宙技術を結集し、異分野融合による高度な宇宙技術の研究・実装を進める。

注3：2022年6月プレスリリース：[地球低軌道上にて将来の月探査のための新たな推進・航法技術を実証—JAXA J-CUBE プログラムにHOKUSHIN-1 衛星が採択—](#)

注4：^{f3}（エフキューブ）工学教育研究センター：北海道大学と室蘭工業大学が共同で設置した教育研究センターで、分野横断型の工学教育と実践的なものづくり・システム開発を通じて、次世代の工学リーダー人材の育成を目的としている。

<https://f3.eng.hokudai.ac.jp/>

[詳細（プレスリリース本文）](#)

問い合わせ先（室蘭工業大学）

研究に関すること

室蘭工業大学 航空宇宙機システム研究センター

教授 内海 政春

TEL: 0143-46-5335 Email: uchiumi@muroran-it.ac.jp

<https://uchuki.com/>

<https://muroran-it.ac.jp/academic/research/aprec/>

みらい共創会議を開催

令和8年1月30日(金)に、みらい共創会議を本学の札幌サテライトオフィス（エア・ウォーターの森）にて開催しました。本会議では、産学官の多様な関係者が一堂に会し、地域産業の発展と課題解決に向けた連携強化について活発な意見交換が行われました。

冒頭で学長の松田機構長から、18歳人口の減少などの大学を取り巻く厳しい環境を踏まえ、地域との協働が大学の未来を左右する重要な要素であると強調されました。続く委員からの挨拶では、カーボンニュートラル、鳥獣害対策、スタートアップ支援、農工連携など幅広い分野において、大学との連携への期待が寄せられました。

報告事項では、水素キャリア、CO₂固定化、バイオマス活用、噴火湾のデジタルツイン化、機能性食品開発など本学が推進する研究プロジェクトの進捗を共有し、社会実装に向けた研究機関、自治体及び地域企業との協力体制の重要性が確認されました。

意見交換では、地域課題を大学の技術へ「翻訳」するコーディネート機能の強化や、産業界のニーズ起点のプロジェクト創出、再生可能エネルギーや鳥獣害対策など喫緊の課題への大学の積極的な関与など、多くの建設的な提案が示されました。

本会議を通じ、地域とともに未来を創る共創体制の深化に向け、今後も本学は産学官の共創拠点としての役割を果たしてまいります。



会議の様子

泉 佑太准教授が道新室蘭政経文化懇話会において 講演を行う

令和8年2月26日(木)に泉佑太准教授が道新室蘭政経文化懇話会において「見えない変化を見える化するレーダ技術 -土木インフラ維持管理と減災への応用-」と題した講演を行いました。

講演では、合成開口レーダ（SAR）の活用を紹介したうえで、SARを活用した災害監視やインフラ設備

の監視、減災を実現する技術開発の取り組みについて解説しました。加えて、講演会場においてMIMO-SARを用いた振動計測の実演を行い、来場者に技術の理解を深めていただきました。泉准教授は「今後もMIMO-SARなどを活用した基礎研究を社会実装化し、新たな価値を見出していきたい。」と講演を締めくくりました。



講演を行う泉准教授



MIMO-SARを用いた振動計測の実演の様子

本学の研究グループの論文が 国際学術誌『RSC Mechanochemistry』の 表紙 (Front Cover) に選出

室蘭工業大学大学院工学研究科 博士後期課程2年の幾島晴輝さん（工学専攻先端環境創生工学コース）と馬渡康輝 准教授（大学院工学研究科 しくみ解明系領域化学生物工学ユニット、希土類材料研究センター）の研究グループによる研究成果が、英国王立化学会（Royal Society of Chemistry）の発行する国際学術誌『RSC Mechanochemistry』に掲載され、その卓越した成果が認められて同誌のFront Cover（表紙）を飾りました。

《研究の背景》

【困難だった「壊れやすい分子」のメカノケミカル合成】

本研究グループではこれまで、環境負荷の低い次世代の合成法として、溶媒を用いず機械的な衝撃で反応を進行させる「メカノケミカル合成」の研究に注力してきました。しかし、今回対象としたポリアセチレン誘導体のような精密ならせん構造を持つ高分子は、過度な熱や圧力によってその構造が容易に崩壊してしまうという課題がありました。

例えるなら、「叩けば割れてしまう繊細なガラス細工を、ハンマーで叩きながら作り上げる」ような極めて困難な試みです。同グループはこれまでに、固体添加剤を共存させることで、反応に必要なエネルギーを伝えつつ、分子への過剰な負荷を和らげる独自の「緩衝手法」を見出していました。今回の成果は、この先行研究で培った高度な技術基盤を応用し、さらに一歩進めて「構造の精密制御」にまで到達したものです。

《研究成果》

【添加剤による「色」と「かたち」の制御】

本研究では、このメカノケミカル合成過程において、添加するアルコールの「炭素鎖の長さ」を変化させることで、高分子のらせん構造を自在に操れることを世界で初めて明らかにしました。

○構造と色彩の相関

高分子鎖が形成するらせん構造の伸縮具合（分子ばねの伸び縮み）により、色の劇的な変化を実現しました。短鎖アルコールを用いた場合は、らせんが伸長した構造

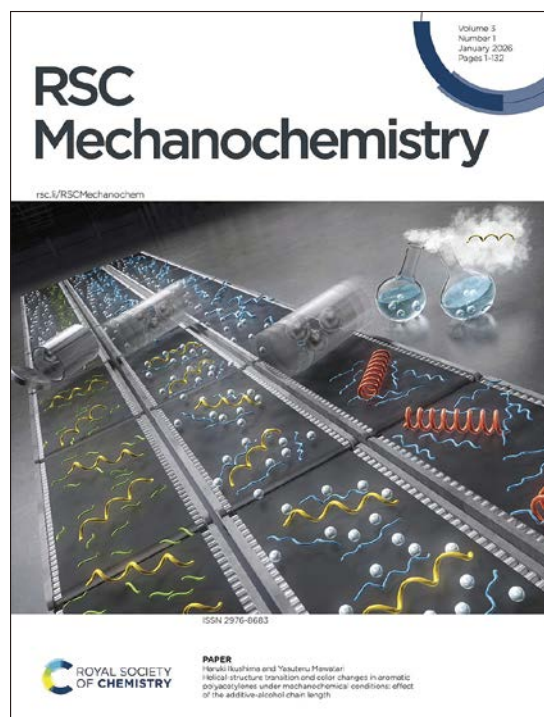
（cis-transoid）となり「黄色」を呈し、長鎖アルコールを用いた場合は、らせんが収縮した構造（cis-cisoid）となり「赤色」へと変化します。

○本手法独自の現象

この色彩制御は、従来の溶液法（液体中での反応）では再現できず、メカノケミカル合成特有の高圧・高せん断力が添加剤と高分子の親和性を極限まで高めたことで初めて可能となりました。「叩いたら壊れやすい構造を守りながら、同時に叩いて精密に作り分ける」という相反する条件を克服した画期的な成果です。

《今後の展望》

本研究は、これまでメカノケミカル合成が不向きとされてきた繊細な機能性高分子において、その構造をナノレベルで制御できる可能性を示しました。今後は、特定の物質や物理的刺激を色の変化で検知する高機能センサーや、環境負荷を抑えた革新的な新材料製造プロセスへの応用が期待されます。



トピックス

《論文情報》

掲載誌

RSC Mechanochemistry, 2026, 3, 38-45.

タイトル

Helical-structure transition and color changes in aromatic polyacetylenes under mechanochemical conditions: effect of the additive-alcohol chain length

著者名

Haruki Ikushima, Yasuteru Mawatari

DOI

10.1039/d5mr00102a

研究に関する問い合わせ

室蘭工業大学 大学院工学研究科 准教授

馬渡 康輝

E-mail : mawatari@muroran-it.ac.jp

教員の業績評価システム（ESTA2025）における 優秀教員表彰式を開催

令和8年2月20日(金)本部棟小会議室において、教員の業績評価システム（Examination System for Teachers' Activities 2025、ESTA2025）における優秀教員表彰式を実施しました。

この表彰制度は、これまで実施してきた教員の多面的評価システム（Appraisal System for Teachers' Activities）における「教育」、「研究」、「社会・国際貢献」、「部局・大学運営」の業績について3年分の累積点数を評価するもので、優れた業績の教員を見出すことを目的として平成27年度から開始したものです。10名の優秀教員が受賞し、表彰式には7名が出席しました。

表彰式では、佐藤理事（総務・財務担当）の列席のもと、松田学長から一人ひとりに表彰状が贈呈され、受賞を祝う言葉が述べられるとともに、今後の更なる活躍を期待する励ましの言葉がありました。

令和7年度教員の業績評価システム（ESTA2025）における優秀教員

もの創造系領域	教授	有村	幹治
もの創造系領域	教授	内海	政春
もの創造系領域	教授	木幡	行宏
もの創造系領域	教授	小室	雅人
もの創造系領域	教授	辻	寧英
もの創造系領域	教授	濱	幸雄
しくみ解明系領域	教授	張	俗喆
しくみ解明系領域	教授	董	冕雄
しくみ解明系領域	教授	徳樂	清孝
しくみ解明系領域	教授	庭山	聡美

(領域・職位・五十音順)



表彰式後の記念撮影

本学学部生の論文が国際雑誌に掲載

令和8年2月に本学学部生である岩渕 有将さんが執筆した論文が、Frontiersの「Frontiers in Marine Science」に受理・掲載されました。

Frontiers in Marine Scienceは、海洋科学分野の最新研究を国際的に発信するオープンアクセス学術誌です。海洋生態学、海洋環境科学、海洋資源管理、海洋物理・化学など、海洋に関わる幅広いテーマを対象としています。

今回の受理・掲載は、学部生の段階の研究としては極めて高い成果であり、研究内容の独創性と学術的価値が国際的に認められたことを示すものです。国際査読誌における論文受理は、専門家による厳正な審査を通過する必要があり、学部学生がこのプロセスを成し遂げることは決して容易ではありません。

《概要》

論文タイトル

Sea-ice discontinuity in ERA5 during 1978–1979 and its impacts in the Sea of Okhotsk

論文URL

<https://www.frontiersin.org/journals/marine-science/articles/10.3389/fmars.2026.1760724/full>

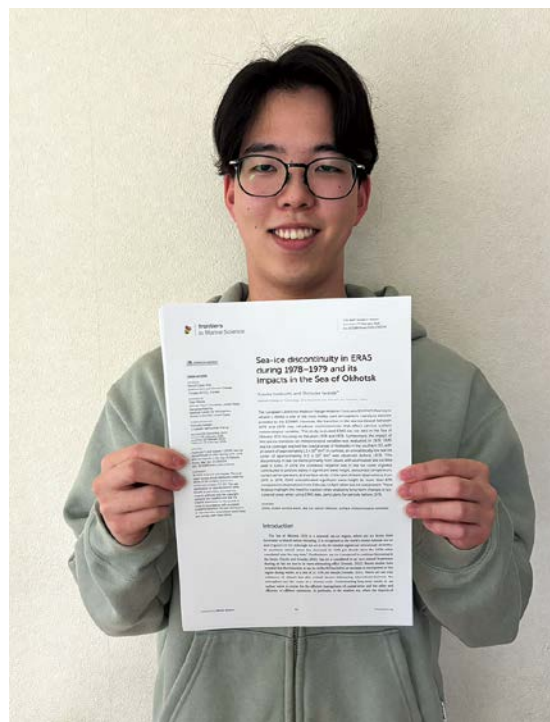
著者

岩渕 有将（創造工学科 建築土木工学コース4年）
岩崎 慎介（もの創造系領域 准教授）

《岩渕 有将さん（第1著者）からのコメント》

この度、私たちの研究論文「Sea-ice discontinuity in ERA5 during 1978–1979 and its impacts in the Sea of Okhotsk」が、国際学術誌Frontiers in Marine ScienceのCoastal Ocean Processesセクションに掲載されたことを、大変光栄に存じます。

本成果は、日頃より多大なるご指導・ご助言を賜りました岩崎慎介准教授をはじめ、ご協力・ご支援いただいたすべての関係者の皆様のお力添えによるものです。ここに深く感謝申し上げます。



論文が受理・掲載された岩渕 有将さん

本学学生がThe 2025 IEEE Sapporo Section Student Paper Contest Encouraging Prizeを受賞

令和7年度 電気・情報関係学会北海道支部連合大会でのThe 2025 IEEE Sapporo Section Student Paper Contestにおいて、本学大学院博士前期課程情報電子工学系専攻共創情報学コース2年の山口一彗さんがEncouraging Prize（奨励賞）を受賞し、令和8年2月16日（月）に北海道大学大学院情報科学研究院にて表彰式が執り行われました。

本賞は、電気・情報関係学会北海道支部連合大会において、優秀な発表を行った学生を表彰するものです。

《受賞内容》

The 2025 IEEE Sapporo Section Student Paper Contest Encouraging Prize（奨励賞）

山口 一彗（大学院博士前期課程情報電子工学系専攻
共創情報学コース2年：董研究室）

論文タイトル

「Deep Reinforcement Learning-based Vehicle Evaluation Guidance in Disaster Situations」

災害発生時の車両避難では、交通混雑や避難所の収容制約により、効率的な避難が困難となります。本研究では、マルチエージェント深層強化学習を用い、特定の避難所への車両集中を抑制します。提案手法は、シミュレーションを通じて避難効率の向上に有効であることを示しており、今後の車両避難誘導の高度化への貢献が期待されます。

《受賞者コメント》

このたびは、2025 IEEE Sapporo Section Student Paper ContestにおいてEncouraging Prizeに選出いただき、誠に光栄に存じます。本成果は、日頃よりご指導いただいた董冕雄教授、太田香教授をはじめ、研究活動を支えていただいた研究室の皆様のお力添えによるものであり、心より感謝申し上げます。本受賞を励みとして、今後も一層精進してまいります。



Encouraging Prizeを受賞した山口さん

本学学生が令和8年度日本機械学会 知能・情報・精密機器部門講演会において 若手優秀講演フェロー賞を受賞

令和8年3月2日(月)、3日(火)に名城大学(名古屋)で開催された令和8年度日本機械学会知能・情報・精密機器部門講演会において本学大学院生産システム工学系専攻機械ロボット工学コースの金子透也さんが「令和7年度日本機械学会若手優秀講演フェロー賞」を受賞しました。

本講演会は、全国からの研究者、技術者が集まる全国大会として、情報機器・精密機器・医療機器に関して、センサ・アクチュエータなどの機構制御技術、小型・高密度なエネルギー技術、AI・自動化などの知能化技術などの広い分野が取り上げられ、関連技術研究者・技術者間の議論・交流・情報交換の場となっています。

本賞は、発表内容が高いレベルにある優秀な講演を行った学生を表彰するもので、令和7年開催同講演会(IIP2025)において講演発表した「路面動画像を用いた地下埋設物点検移動ロボットの自己位置推定精度に関する検討」の論文内容および講演発表が総合的に評価され、優秀と認められての受賞です。

《概要》

論文タイトル

「路面動画像を用いた地下埋設物点検移動ロボットの自己位置推定精度に関する検討」

近年、インフラ構造物の劣化が社会課題となっており、中でも地中埋設インフラ構造物点検は人手で行われており、ロボットによる自動化が求められています。ロボットには事前の測線設定作業が不要かつ長距離移動時に高精度な自己位置推定技術が必須となります。本研究では、撮影した路面動画像から自己位置推定を行うビジュアルオドメトリ(VO)の検討を行っています。本発表では、カメラの取り付け角度など実装の影響や、VOアルゴリズム自体の課題を解決すべく、取り付け角度誤差の解消のためのキャリブレーション機能と特徴点算出方法変更改良が、自己位置推定精度の向上に有効な手段となることを示しました。

著者

金子 透也 (大学院生産システム工学系専攻 機械ロボット工学コース2年 精密メカトロシステム研究室)

伊藤 寛人 (大学院情報電子工学系専攻 共創情報学コース1年 精密メカトロシステム研究室)

水上 雅人 (もの創造系領域 教授)

《受賞者のコメント》

この度、令和7年度日本機械学会若手優秀講演フェロー賞を授与いただきました。大変光栄に存じます。関係者各位に深く感謝申し上げます。誠にありがとうございます。本受賞を励みに、今後も社会人として研究開発活動に取り組んでまいります。



表彰状

大和工業株式会社とネーミングライツ事業実施契約を締結

国立大学法人室蘭工業大学（以下「室蘭工業大学」）と大和工業株式会社（本社：室蘭市、代表取締役社長：黒龍 雅英、以下「大和工業」）は、大学施設のネーミングライツ（施設命名権）取得に関する「ネーミングライツ事業実施契約」（以下「本契約」）を締結しました。

室蘭工業大学は、自己収入の拡大を図り、大学の教育及び研究に資することを目的に、ネーミングライツ制度を令和8年1月に導入しました。このたび、「学生食堂」のネーミングライツ公募に大和工業が応募し、選定委員会による審査を経て、ネーミングライツ・パートナーに選ばれました。

契約期間は、令和8年3月2日から令和13年3月1日までとなり、同施設の名称は「YAMATO Kitchen」となります。

なお、室蘭工業大学のネーミングライツ契約は、本契約が初めてとなります。

ネーミングライツ・パートナーとなる大和工業は、耐火物施工技術を核とし、製鉄プラント向けの設計・施工から、特殊耐火物のメンテナンス、さらにはコークス炉の新設・補修工事までを一貫して担う専門企業です。長年にわたり蓄積してきた高度な築炉技術、細部まで行き届いた施工管理、そして徹底した安全管理をもとに、「信頼の耐火物施工」を実現し、製鉄インフラの長寿命化と安定操業に大きく貢献しています。

室蘭工業大学と大和工業は連携して、「YAMATO Kitchen」の愛称が多くの学生に親しまれ定着するよう努めてまいります。

1. ネーミングライツ・パートナー

- (1) 法人名：大和工業株式会社
- (2) 本社所在地：北海道室蘭市輪西町一丁目4番8号
- (3) 代表者：代表取締役社長 黒龍 雅英

2. 対象施設

学生食堂（室蘭工業大学学生会館1階、延床589㎡）

3. 愛称

〈アルファベット表記〉YAMATO Kitchen
〈日本語表記〉ヤマトキッチン

4. 契約期間

令和8年3月2日から令和13年3月1日まで

5. 愛称の使用

施設出入口付近等にサインの掲示



当該施設に設置された愛称名サイン



企業紹介ボード



学生食堂

トピックス

6.その他

ネーミングライツ施設のオープニングセレモニーは、令和8年4月に開催しました。

本件に関するお問い合わせ先

国立大学法人室蘭工業大学 経理課調達係

〒050-0071 北海道室蘭市水元町27番1号

TEL：0143-46-5054

E-mail：youdo@muroran-it.ac.jp

大和工業株式会社

〒050-0085 北海道室蘭市輪西町一丁目4番8号

TEL：0143-44-2664

E-mail：saiyou@f-yamato.co.jp

令和7年度異分野融合セミナーを開催

令和8年3月16日(月)に教育・研究3号館N棟N310講義室において令和7年度異分野融合セミナーを開催し、約43名が参加しました。

今回は、名古屋大学 未来材料・システム研究所 助教の伊東山 登氏を講師にお招きし「分野横断的の大学活動から得た燃焼・宇宙航空推進の広がり」と題して、分野横断の結果、燃焼・推進の世界で希少であるChemical engineerとして活躍に至ったバックボーンや基礎についてなど、本学博士課程学生にとって大変示唆に富む内容を講演いただき、参加者は興味深く聴き入っていました。

講演後の質疑応答では、会場の参加者からの質問に対して丁寧な説明があり、セミナーは盛況のうちに終了しました。



講演する伊東山氏

アイヌ伝承植物ノブキクッキーの販売開始 —白糠アイヌに親しまれてきた伝承植物「ノブキ」と 道内産の食材を、5色のクッキーに—

室蘭工業大学とNPO法人 ten to ten（北海道室蘭）が連携し、白糠アイヌに伝承されてきた植物「ノブキ」と道内産の食材を使用した「アイヌ伝承植物ノブキクッキー」を共同開発しました。本商品は、室蘭工業大学学生会館内のカフェ「TENTO」において、令和8年3月23日(月)10時から数量限定で販売を開始します。



【開発の背景】

「ノブキ（野露）」(写真右)は、湿気のある山間部などに自生するキク科の多年草であり、白糠町周辺に暮らすアイヌは、山菜や薬草として活用していましたが、現代では利用されることはなくなり、アイヌが使っていたという知見だけが受け継がれていました。

本学と包括連携協定を結んでいる白糠町において、[上井幸司](#) 准教授・博士(薬学)は、ノブキを科学的に研究し、抗酸化作用や加工による機能性向上の可能性のあることを突き止めると同時に、アイヌ伝承植物の価値や可能性に関する地域連携に取り組んできました。

ノブキという地域資源をきっかけに白糠アイヌの食文化を広めようと、2023年11月から「ノブキクッキープロジェクト」がスタート、本学にあるカフェ「TENTO」を運営するNPO法人 ten to tenが中心となり、商品開発を進め、この度の販売開始となりました。



【商品の特徴】

アイヌ伝承植物ノブキクッキーは、野草であるノブキが持つピリッとした風味を生かしつつ、道内産の小麦や乳製品などの食材を組み合わせて、5種類（5色）の味わいを楽しめるクッキーとして仕上げました。上井准教授は、食品の機能性成分を計測するシステムを開発（特許出願中）し、認知症の予防に繋がる研究を行っており、その研究の過程でノブキには、ポリフェノール（赤ワインの約2倍）やカルシウムなどのミネラルが豊富に含まれていることが明らかになっています。

本商品は、地域の資源や食文化の魅力を伝えるとともに、室蘭工業大学と白糠町の連携を象徴する室蘭工業大学公認の商品となっています。



【販売概要】

商品名：アイヌ伝承植物ノブキクッキー
販売価格：クラフト箱（小9枚、大1枚）：
1,350円（税込み）
袋（小5枚）：680円（税込み）
販売開始日時：令和8年3月23日(月)10時から
販売場所：室蘭工業大学 大学会館内
カフェ「TENTO」
※販売数量に限りがあるため、なくなり次第販売を終了
いたします。

【企画・製作】

国立大学法人室蘭工業大学、NPO法人 ten to ten「TENTO」、
Café Pito、Li world

【協力団体】

白糠町、白糠アイヌ協会、白糠アイヌ文化保存会

本件に関するお問い合わせ先：

国立大学法人室蘭工業大学 総務広報課秘書広報係
〒050-8585北海道室蘭市水元町27番1号
TEL：0143-46-5008

NPO法人 ten to ten「TENTO」
〒050-8585 北海道室蘭市水元町37番8号
室蘭工業大学 大学会館1階
TEL：080-1447-8085



クラフト箱（小9枚、大1枚）：1,350円（税込み）



袋（小5枚）：680円（税込み）

国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部との 包括連携協定に関する打ち合わせを実施

令和8年3月9日(月)に国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部(以下:室蘭開建)との包括連携協定に関する定例打ち合わせを本学本部棟中会議室において開催しました。

本学と室蘭開建は、平成25年12月に「安全・安心な地域づくり」と「胆振・日高地域の持続的発展」に寄与することを目的として、包括連携協力に関する協定を締結し、その後、定期的な打ち合わせを開催しております。今回の打ち合わせでは、取り組み状況の報告や、エゾシカによるロードキル対策、鶴川・沙流川の今後の河川整備の進め方などについて意見交換を行いました。

今後も本学と室蘭開建は、社会資本整備に関わる人材育成、学術振興の促進、地域の活性化、そして安心・安全な社会基盤づくりに向けた取り組みを、より組織的かつ効果的に進めてまいります。



打ち合わせの様子

室蘭ビジネスコンテスト 最終審査会を開催

令和8年3月9日(月)、教育・研究1号館N104講義室において、室蘭ビジネスコンテスト最終審査会を開催しました。

今回のコンテストには、高校生の部4件、一般・大学生の部4件、合計8件の応募があり、地域の未来を見据えた多様なビジネスアイデアが発表されました。

審査会では、「起業意志・熱意」「地域性」「計画性・実現性」「市場性・将来性・持続性」「新規性・獨創性」の5項目(各20点)を基準に審査が行われました。

審査員には、室蘭信用金庫 山田理事長、室蘭テクノセンター 芳賀技術コーディネーター、日本政策金融公庫室蘭支店 佐藤融資課長、パナソニックITS株式会社室蘭開発室 佐藤室長、本学の増田理事および河合地域連携人材育成センター長の計6名が参加しました。

高校生の部では、アレルギー対応アプリの提案、冷感グッズの開発、空き家活用による睡眠スペース提供など、身近な課題を創造的に解決するアイデアが披露されました。

一般・大学生の部では、空き家を活用した外国人労働者の住環境改善、スマートシティ構想、デジタルツイン技術による防災アプリ開発など、地域の課題解決に直結する実践的な提案が多数見られました。

一般財団法人むろしん緑の基金の助成を受けて実施した本コンテストでは、地域課題の解決に挑む若い世代の発想力と実行力が示されました。

室蘭工業大学は、今後も地域と連携し、起業家精神を育む取り組みを推進してまいります。



集合写真

第1回 室蘭ビジネスコンテスト最終審査結果						R8.3.9
高校生の部						
代表者名	所属	学年	メンバー数	タイトル	審査結果	
越後 雄快	大谷室蘭高校	3年	2	安心してください!!食べられますよ ～食物アレルギー-低みゼロへ～ スマホアプリケーション開発	最優秀賞 5万円	
佐々木 幸志	大谷室蘭高校	2年	4	すずまる勝とすずまろう!!! 冷感グッズの開発	優秀賞 2万円	
矢野 芽衣	大谷室蘭高校	3年	3	睡眠を売ります～忙しいあなたへ～ 空き家、閉校校舎の活用して睡眠場所を提供する	奨励賞 1万円	
岡部 裕太	大谷室蘭高校	2年	4	MURORAN LOCAL EXPERIENCE TOUR 観光プラン提供(ガイド)	奨励賞 1万円	
一般・大学生の部						
代表者名	所属	学年	メンバー数	タイトル	審査結果	
葛西芳枝	室工大 +一般	大学院D1	2	地域企業を支える!地域連携を全国に広げた空き家を活用した外国人労働者の"第二の住まい"1/	最優秀賞 10万円	
伊藤信智	西野 製作所	一般	1	宝飾・製造知識と社会経験をつなぐ「技術・意思連携型」スマートシフト労働者～「ものづくり」の利便で、人の心と次世代を育む「灯(あかり)」エコシステム～	優秀賞 5万円	
小山美咲	室工大	4年	5	デジタルツインを活用して現実の津波を想起させ避難行動を促すためのアプリ開発	奨励賞 2万円	
落合宏紀	室工大	4年	1	Market! 学生の創作活動を「地域向けの広告・PRコンテンツ」として活用し、アプリポイントを活用して地元企業の広告費を軽減づけることで、学生の柔軟な収入源と、企業の手続き自動化ソリューション手段を同時に提供	奨励賞 2万円	

室蘭工業大学公認サークルSARDが 自作エンジン搭載ロケット「宙の芽」の打上げに成功

令和8年3月14日(土)に本学の公認学生サークル 学生宇宙研究開発機構(以下:SARD)が北海道大樹町にて、自作エンジンを搭載したハイブリッドロケット「宙の芽」の打上げ実験を行い、成功しました。

これまでの打上げ実験は既製品エンジン搭載によるもので、自作エンジン搭載の実験は初めてとなります。実験当日は、SARDに所属している学生18名が参加し、エンジンの設計・製作から機体開発など実験の運用まで一貫して学生が主体となって実施されました。

《実験の概要》

○実験の主な目的

- ・自作エンジンの性能実証
- ・飛行時の燃焼圧力等のデータの取得
- ・到達高度記録の更新

○ロケット「宙の芽」の詳細

- ・全長:1.834m
- ・直径:13.5cm
- ・全備重量:約11kg
- ・エンジン:燃料固体のポリエチレン、酸化剤として気体酸素を使用

今回の打上げ実験は午後4時15分に発射され、高度712mへ到達しました。以前の最高到達高度は209mであったため、大幅な記録更新となりました。パラシュートも正常に作動し、射点から南東185m地点に着地、機体の完全回収にも成功し、すべての機能が設計通りに動作したことが確認されました。

《今後の展望》

今回得られた飛行データおよび回収機体の分析結果をもとに、SARDはさらなる改良を進め、将来的には宇宙空間(高度100km以上)到達を目指したロケット開発に取り組みます。

また、構造材のCFRP化による軽量化など、高高度化に向けた技術開発も進めていく予定です。

《プロジェクトマネージャー 島 杏成さん(創造工学科 航空宇宙工学コース 3年)のコメント》

クラウドファンディングや協賛でご支援いただいた方には感謝の気持ちでいっぱいです。

3年間頑張ってきて本当に良かったです。後輩には私たちの記録を更新できるように頑張してほしいと思います。

今回の打ち上げを通して宇宙への関心がより高まりました。今後も研究でロケットに関わっていきたいです。

《アシスタントマネージャー 沖 優昌さん(創造工学科 航空宇宙工学コース 3年)のコメント》

2024年4月から本格的に取り組んできた自作エンジン開発の節目となる本実験を無事に成功させることができ、感動とともに安堵しています。

今回の結果は、これまで積み重ねてきたものが成果として現れたと強く実感していると同時に、まだ改善の余地や伸び代も多く残されていると感じています。

本実験をもって、私自身はサークルを引退となりますが、今回得られた成果や経験を後輩たちに託し、SARDの最終目標である宇宙空間到達の実現へとつながっていくことを心から願っています。

トピックス



発射準備の様子①



発射準備の様子②



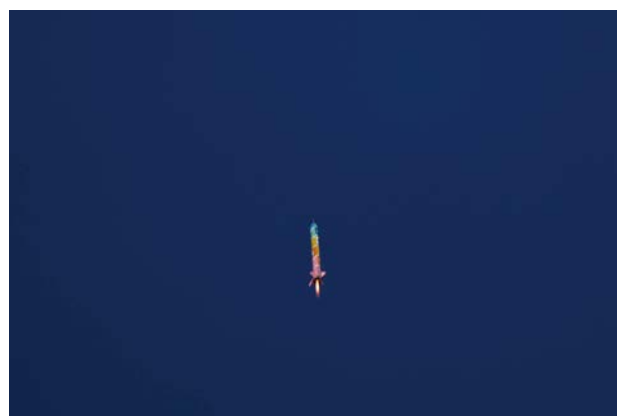
発射準備の様子③



発射準備の様子④



発射直後のロケットの様子



飛行するロケットの様子

トピックス



パラシュートが正常に作動した様子



発射したロケットを見守るSARDのメンバー



打上げ成功後の記念撮影
(左：プロジェクトマネジャー 島 杏成さん 右：アシスタントマネジャー 沖 優昌さん)

ABC国際学会を開催

令和8年3月9日(月)、室蘭工業大学学生会館多目的ホールにおいて、ABC国際学会(The 8th International Conference on Activity and Behavior Computing)を開催しました。

本学会は、人間の活動・行動を理解するためのセンシング、AI、行動解析など幅広い領域を対象とし、IEEE技術協賛のもと開催される国際会議です。

開会にあたり、松田学長より挨拶があり、午前のプログラムでは董冕雄コンピュータ科学センター長が基調講演のセッションチェアを務めました。

当日は、行動計算・AI・センシング技術に関する口頭発表や議論が行われた後、レセプションが開催され、国内外から参加した研究者・学生が活発に交流し、研究の視点を広げる貴重な機会となりました。



開会の挨拶をする松田学長



セッションチェアを務める董コンピュータ科学センター長



基調講演を行う太田香教授



学会にて質問をする本学学生



集合写真 (学会)



集合写真 (レセプション)

第2回鹿サミット -自然と響き合う- を開催

令和8年3月15日(日)に本学札幌サテライトオフィス(エア・ウォーターの森)において、第2回鹿サミット-自然と響き合う-が開催され、一般の方や本学関係者含む約120名(オンライン含む)が参加しました。

基調講演では、天内重樹氏(白糠アイヌ協会会長)より「アイヌの考え方」と題した講演をいただきました。続いて、坂東元氏(旭山動物園統括園長)より、「エゾシカとの共存の未来を探る」と題してご講演いただきました。

また、特別講演として、佐賀真一氏(旭山動物園飼育スタッフ主査/えぞひぐま館)より、「動物園が伝えるエゾヒグマ~えぞひぐま館の紹介~」と題した講演をいただきました。

その後、柳井健史郎(室蘭市生活環境課市民生活係)、

北海道札幌月寒高等学校生徒、溝端一秀准教授(室蘭工業大学)、李鶴准教授(室蘭工業大学)、上井幸司准教授(室蘭工業大学)から地域の現状、対策の紹介、最新研究の紹介が行われ、パネルディスカッションでは、徳樂教授がモデレーターを務め、磯部恵津子氏(白糠アイヌ文化保存会)ら6名のパネリストや会場の参加者を交えて、ヒトと自然が共生するための方策(技術、仕組み、文化、教育、まちづくり、etc.)について活発な議論と意見交換が行われました。

鹿サミット終了後は、交流会を実施し、白糠アイヌ文化保存会の磯部恵津子氏、白糠町議会議員の池村美博氏による白糠町のエゾ鹿肉を使った「ポネオハウ」や鹿肉ソーセージ、鹿肉ハムスライスなどが振舞われました。



鹿サミットの企画運営を担った徳樂教授



天内重樹氏(白糠アイヌ協会会長)



坂東元氏(旭山動物園統括園長)



佐賀真一氏(旭山動物園飼育スタッフ主査/えぞひぐま館)

トピックス



柳井健史郎氏（室蘭市生活環境課市民生活係）



札幌月寒高校の生徒たちの発表



溝端一秀准教授（室蘭工業大学）



上井幸司准教授（室蘭工業大学）



李鶴准教授（室蘭工業大学）



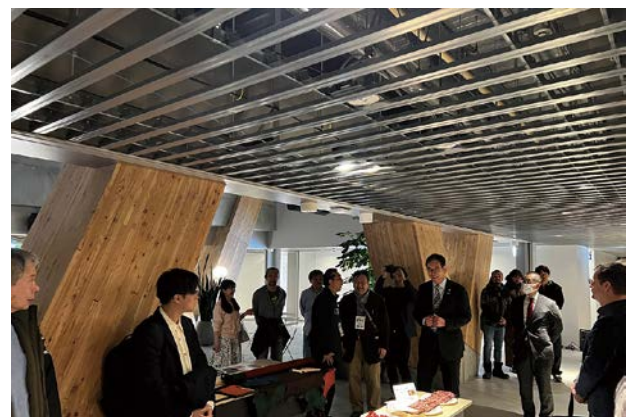
パネルディスカッションの様子



鹿サミット終了後の記念撮影



料理について説明する池村美博氏



交流会の挨拶を述べる増田理事・副学長



白糠町のエゾ鹿肉を使った「ボネオハウ」

第2回
鹿サミット
自然と響け

2026年
3月15日(日)
13:00-17:45 (開場 12:30)

参加申込 3月6日(金)まで

オンライン 講演(無料参加)
会場 エア・ウォーターの森
〒100-8305 東京都千代田区千代田1-3-2020(2F)
オンライン 講演(無料参加) YouTube Live

オープニング 13:00

基調講演 13:15 アイタの考え方 天内 美穂氏(白糠アイタ協会 会長)
14:00 エゾシカとの共存の未来を探る 榎本 元氏(旭山動物園 館長)

特別講演 15:00 動物園が伝えるエゾヒゲマメ〜ズドリ〜は鹿の紹介〜
榎本 元氏(旭山動物園 飼育スタッフ 美濃ノズドリ)

報告 15:30 空幌市の有害鳥獣対策について 榎井 健太郎氏(空幌市 生活環境課 市民生活係)
15:45 プロジェクトFOK 〜いろいろあったキタキツネとこれからの私たち〜
渡辺 真矢、吉田 那由美氏、宇村 孝丸、大塚 仁志、小宮 隆平氏、瀧口 隼太氏(北海道札幌学院高等学校)
16:00 アイタの飛羽メニエム 渡辺 一希氏(空幌工業大学)
16:15 エゾシカ調査が家畜も獣害対策します。 中 根(空幌工業大学)
16:30 エゾシカ資源の新たな価値創出に向けた取り組み 上野 孝司氏(空幌工業大学)

パネル
ディスカッション 17:00 キタキツネ 榎本 浩幸氏(空幌工業大学)
パネラー 天内 美穂氏、榎本 元氏、榎田 美津子氏(白糠アイタ文化保存会 会長)、
伊藤 勉二氏(空幌市 生活環境課 部長)、村中 幸一氏(北海道札幌学院高等学校 教員)

クローージング 17:45

交流会 18:00-20:00 榎井 美津子氏、榎田 美穂氏(白糠アイタ協会 議員)による
エゾ鹿のアイタメニエム(など)飲み放題つき。
会場費 4000円 会場 エア・ウォーターの森 1F エゾシカホール

主催 空幌工業大学 エゾシカプロジェクト・ソラチキョウ
協賛 空幌工業大学 空幌市 ONO-びり(ふ)い 共同機構、北海道大学 社会・地域創成本部、空幌市
会場 空幌工業大学 エゾシカホール(ソラチキョウ) 〒100-8305 東京都千代田区千代田2-1-1 ☎ 03-43-48-5721 www.kita-kitsune.jp

J-Office
Sorachi City, Sorachi Subprefecture, Sorachi District, Sorachi, Hokkaido

第5回クリエイティブコラボレーションセンター ワークショップ& 第2回プレタスクフォース ワークショップとYomo-Yamaノ宴を開催

令和8年3月6日(金)に、室蘭工業大学N401講義室、大会館多目的ホールおよびカフェ TENTOにて、第5回クリエイティブコラボレーションセンターワークショップ& 第2回プレタスクフォースワークショップおよびYomo-Yamaノ宴を開催しました。

■第1部：第5回クリエイティブコラボレーションセンターワークショップ& 第2回プレタスクフォースワークショップ

本学教職員、学生、地域の皆様など75名が参加した、本ワークショップでは、特別講演として、前マラウイ全権大使大矢洋一氏をお招きし、アフリカをはじめとする後進国の現状についてお話しいただきました。講演では、多くの日本人技術者や専門家がこれらの地域で活躍し、厚い信頼を得ている実情が紹介され、日本が世界で3番目に後進国への金銭的支援を行っていること、その支援が外交面でも大変重要な意味を持つことについても述べられました。

また、ワークショップでは、今年度活動している14件のプレタスクフォースからそれぞれの成果報告が行われました。



前マラウイ全権大使 大矢洋一氏 による講演の様子



クリエイティブコラボレーションセンターの前にて記念撮影

同日に行われた、ポスター発表では、プレタスクフォースによる発表に加えて、学生等から22件の発表があり、投票により選ばれた上位5件にポスター賞を授与しました。

ポスター賞受賞者 (50音順)

- 荒谷康貴さん (室蘭工業大学大学院工学研究科)
「アルツハイマー病とパーキンソン病の併発メカニズムの解明」
- 加藤優弥さん (室蘭工業大学大学院工学研究科)
「デジタルネイティブ世代の主な住まいとは異なる他地域への意識に関する研究」
- 深江陸斗さん (室蘭工業大学大学院工学研究科)
「北海道然別地域産蛍光オパール蛍光起源となる化合物の分析」
- 増澤有咲さん (室蘭工業大学理工学部)
「胸部X線画像における異常検出手法と分類手法を併用した緊急性疾患の判別」
- 吉田芽以さん (室蘭工業大学理工学部システム理化学科)
「時空間グラフ畳み込みネットワークを用いた2D骨格データによる歩行異常検出」



ポスター賞授与式の様子

■第2部：Yomo-Yamaノ宴

第2部のYomo-Yamaノ宴では、分野や職域を超えた交流を通じてヒューマンネットワークを広げることを目的に開催され、本学教職員・学生に加え、他大学等からの参加者を含む30名が参加し、和やかな雰囲気の中で活発な意見交換が行われました。



Yomo-Yamaノ宴の様子

MONOづくりみらい共創機構「プレ共同研究」(6回目)の採択

令和7年度MONOづくりみらい共創機構プレ共同研究(6回目)公募の結果、次のとおり採択されました。

本事業は、本学教員と民間機関等との研究者が、次年度以降において民間機関等との共同研究へ発展させるための前段階に相当する共同研究に対して助成を行うものです。

研究代表者・職・氏名	民間企業等	採択金額 (千円)
もの創造系領域 准教授 栗原浩平	(株)白糠酪恵舎	500
しくみ解明系領域 教授 山中真也	リコーITソリューションズ(株)	500
合 計 (2件)		1000

外部資金

民間等との共同研究の受入れ

研究代表者・職・氏名	相手方区分	金額 (千円)
もの創造系領域 教授 風間俊治	大企業	260
合計(1件)		260

※大企業・中小企業の別は、中小企業基本法（昭和38年法律第154号）第2条による。

奨学寄附金の受入れ

寄 附 者	目 的	金 額 (千円)
特定非営利活動法人地下資源イノベーションネットワーク	寄 附 講 座	1,700
公益財団法人鹿島学術振興財団	工 学 研 究 助 成	2,850
公益財団法人鹿島学術振興財団	工 学 研 究 助 成	1,500
公益財団法人電気通信普及財団	工 学 研 究 助 成	600
札幌日信電子株式会社	工 学 教 育 助 成	1,000
JFEプラントエンジニア株式会社	工 学 教 育 助 成	300
株式会社アイエイアイ	工 学 研 究 助 成	1,000
公益財団法人電気通信普及財団	工 学 研 究 助 成	1,600
公益財団法人電気通信普及財団	工 学 研 究 助 成	2,500
公益財団法人電気通信普及財団	工 学 研 究 助 成	2,970
株式会社クリーンアップ	工 学 研 究 助 成	200
団体寄附者（1件） ※室蘭工業大学古本募金	図書館資料・設備の 充実のため	57
合 計 (12件)		16,277

人事

人事異動

国立大学法人
室蘭工業大学長発令

発令年月日	異動内容	氏名	現職
令和8年3月31日	〈定年退職〉	木幡行宏	大学院工学研究科教授 (もの創造系領域)
		藤木裕行	大学院工学研究科教授 (もの創造系領域)
		吉成哲	大学院工学研究科教授 (もの創造系領域)
		永野宏治	大学院工学研究科教授 (しくみ解明系領域)
		矢野隆治	大学院工学研究科准教授 (しくみ解明系領域)
令和8年3月31日	〈任期満了〉	荒木正子	監査室再雇用職員(監査係)
令和8年3月31日	〈辞職〉	西原慧	大学院工学研究科助教 (しくみ解明系領域)
		REED COREY HUNTER	大学院工学研究科特任講師 (ひと文化系領域)
		若杉清仁	技術部技術専門職員
令和8年3月31日	〈辞職〉(転出)	長川英樹	事務局次長
		菅野直樹	施設課長
		千葉浩之	総務広報課図書学術情報室長
	東海国立大学機構岐阜大学学務部長(兼) 東海国立大学機構教育戦略部長		
	北海道大学施設部環境配慮促進課長		
	鳥取大学研究推進部図書館情報課長		

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
	〈任 命〉		
令和8年4月1日	理事（総務・財務担当）（任期R10.3.31）	佐藤孝紀	
	理事（学術・情報担当）（任期R10.3.31）	桃野直樹	
	理事（研究・連携担当）（任期R10.3.31）	増田隆夫	
	〈採 用〉(転 入)		
令和8年4月1日	大学院工学研究科教授（ひと文化系領域）	関朋昭	鹿屋体育大学スポーツ人文・ 応用社会科学系教授
	大学院工学研究科准教授（ひと文化系領域） 兼務：国際交流センター	佐藤友映	東洋大学総合情報学部助教
	大学院工学研究科助教（もの創造系領域）	松林美樹	
	大学院工学研究科助教（もの創造系領域）	青野浩平	精電舎電子工業株式会社 研究開発員
	大学院工学研究科特任教授（もの創造系領域） 兼務：寄附講座・道路防災・維持管理工学講座	木幡行宏	大学院工学研究科教授 （もの創造系領域）
	大学院工学研究科特任教授（もの創造系領域） 兼務：MONOづくりみらい共創機構	縄田健志	西江建設株式会社 常務取締役
	大学院工学研究科特任教授（もの創造系領域） 兼務：MONOづくりみらい共創機構	吉成哲	大学院工学研究科教授 （もの創造系領域）
	大学院工学研究科特任教授（しくみ解明系領域） 兼務：国際交流センター、キャリア・サポート・ センター	永野宏治	大学院工学研究科教授 （しくみ解明系領域）
	施設課長	空橋博幸	北海道大学施設部 環境配慮促進課長
	総務広報課図書学術情報室長	三隅健一	北海道大学学術情報部学術情報 支援課係長 （函館キャンパスグループ・ 水産学部図書担当）
	総務広報課係員（総務係）	石崎春華	
	総務広報課係員（労務管理係）	鈴木花音	
	学務課係員（学生支援係）	星川葉月	
	〈昇 任〉		
令和8年4月1日	大学院工学研究科教授（もの創造系領域）	大石義彦	大学院工学研究科准教授 （もの創造系領域）
	大学院工学研究科教授（しくみ解明系領域）	倉重健太郎	大学院工学研究科准教授 （しくみ解明系領域）

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職	
令和8年4月1日	大学院工学研究科教授（ひと文化系領域）	GAYNOR Brian, Nollaig	大学院工学研究科准教授 （ひと文化系領域）	
	大学院工学研究科准教授（もの創造系領域）	藤 平 祥 孝	大学院工学研究科助教 （もの創造系領域）	
	経理課副課長	井 内 大 介	入試戦略課係長（入試企画係） 兼務：入試戦略課係長（キャリア支援係）	
	経営企画課係長（評価分析係（教員評価担当））	一 家 ひとみ	経営企画課主任（評価分析係）	
	総務広報課係長（労務管理係（福利厚生担当））	大 金 慎二郎	総務広報課主任（労務管理係）	
	施設課係長（施設係（機械担当））	三 平 淳 也	施設課主任（施設係（設備担当））	
	経理課主任（経理係）	池 田 麻 衣	経理課係員（経理係）	
	技術部技術専門員	村 本 充	技術部技術専門職員	
	技術部技術専門員	湯 口 実	技術部技術専門職員	
	技術部技術専門職員	相 馬 達 也	技術部技術員	
	<配置換>			
	経営企画課係長（評価分析係（法人評価担当））	白川部 直 人	経営企画課係長（評価分析係）	
	総務広報課係長（労務管理係（労務担当））	渡 邊 唯	総務広報課係長（労務管理係）	
	入試戦略課係長（入試企画係） 兼務命：入試戦略課係長（キャリア支援係）	永 利 卓	入試戦略課国際交流室係長 （国際企画係）	
技術部特命職	小 西 敏 幸	技術部技術専門員		
技術部特命職	山 森 英 明	技術部技術専門員		
技術部特命職	佐 藤 考 志	技術部技術専門職員		
技術部特命職	新井田 要 一	技術部技術専門職員		
令和8年4月1日	<任用更新>			
	永 田 晴 紀	（クロスアポイントメント） 北海道大学大学院工学研究院教授 大学院工学研究科教授 （もの創造系領域）		
	小笠原 克 彦	（クロスアポイントメント） 北海道大学大学院保健科学研究 院教授 大学院工学研究科教授 （しくみ解明系領域）		

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
		相 津 佳 永	大学院工学研究科特任教授 (もの創造系領域) 兼務：キャリア・サポート・センター
		河 合 秀 樹	大学院工学研究科特任教授 (もの創造系領域) 兼務：地域連携人材育成センター
		岸 徳 光	大学院工学研究科特任教授 (もの創造系領域) 兼務：寄附講座・社会基盤管理工学講座
		板 倉 賢 一	大学院工学研究科特任教授 (しくみ解明系領域) 兼務：寄附講座・未利用資源エネルギー工学講座
	<命>		
令和8年4月1日	経営協議会委員（任期：R10.3.31）	佐 藤 孝 紀	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	副学長（任期：R10.3.31）		
	技術部長（任期：R10.3.31）		
	経営協議会委員（任期：R10.3.31）	桃 野 直 樹	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	副学長（任期：R10.3.31）		
	附属図書館長（任期：R10.3.31）		
	大学院工学研究科博士後期課程工学専攻長 (任期：R10.3.31)		
	理工学人材育成本部長（任期：R10.3.31）		
	理工学基礎教育センター長（任期：R10.3.31）		
	経営協議会委員（任期：R10.3.31）	増 田 隆 夫	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	副学長（任期：R10.3.31）		
	航空宇宙機システム研究センター長 (任期：R10.3.31)		
	MONOづくりみらい共創機構副機構長 (任期：R10.3.31)		

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
	副学長（任期：R10.3.31）	川 村 志 麻	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	副学長（任期：R10.3.31）	花 島 直 彦	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	教育推進支援センター長（任期：R10.3.31）		
	副学長（任期：R10.3.31）	市 村 恒 士	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	MONOづくりみらい共創機構副機構長 （任期：R10.3.31）		
	副学長（任期：R10.3.31）	関 根 ちひろ	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	希土類材料研究センター長（任期：R10.3.31）		
	副学長（任期：R10.3.31）	吉 田 勇 人	
	経営協議会委員（任期：R10.3.31）		
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	学長補佐（任期：R9.3.31）	清 末 愛 砂	
	学長補佐（任期：R9.3.31）	廣 田 光 智	
	学長補佐（任期：R9.3.31）	飯 森 俊 文	
	学長補佐（任期：R9.3.31）	岡 田 吉 史	
	学長補佐（任期：R9.3.31）	董 冕 雄	
	コンピュータ科学センター長 （任期：R10.3.31）		
	学長補佐（任期：R9.3.31）	吉 田 雅 典	
	国際交流センター長（任期：R10.3.31）		
	もの創造系領域長（任期：R10.3.31）	渡 邊 浩 太	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	しくみ解明系領域長（任期：R10.3.31）	近 藤 敏 志	
	経営協議会委員（任期：R10.3.31）		
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	ひと文化系領域長（任期：R10.3.31）	森 田 英 章	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	理工学部創造工学科長（任期：R10.3.31）	小 室 雅 人	

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
	経営協議会委員（任期：R10.3.31）		
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	理工学部システム理化学科長 （任期：R10.3.31）	神 田 康 晴	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	大学院工学研究科博士前期課程環境創生工学系専 攻長（任期：R10.3.31）	真境名 達 哉	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	大学院工学研究科博士前期課程生産システム工学 系専攻長（任期：R10.3.31）	今 井 良 二	
	経営協議会委員（任期：R10.3.31）		
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	大学院工学研究科博士前期課程情報電子工学系専 攻長（任期：R10.3.31）	倉 重 健太郎	
	教育研究評議会評議員（任期：R10.3.31）		
	保健管理センター所長（任期：R10.3.31）	三 矢 恵 理	
	キャリア・サポート・センター長 （任期：R9.3.31）	相 津 佳 永	
	ものづくり基盤センター長（任期：R10.3.31）	寺 本 孝 司	
	MONOづくりみらい共創機構副機構長 （任期：R9.3.31）	吉 成 哲	
	情報教育センター長（任期：R9.3.31）	桑 田 喜 隆	
	研究基盤設備共用センター長 （任期：R10.3.31）	中 野 英 之	
	地域連携人材育成センター長 （任期：R9.3.31）	河 合 秀 樹	
	クリエイティブコラボレーションセンター長 （任期：R10.3.31）	徳 樂 清 孝	
	〈兼 務〉		
令和8年4月1日	入試戦略課国際交流室係長（留学生係） 兼務：入試戦略課国際交流室係長（国際企画係）	境 謙	入試戦略課国際交流室係長 （留学生係）
	技術部第二技術室長	村 本 充	技術部技術専門職員
	技術部第三技術室長	宮 本 政 明	技術部技術専門員
	技術部第一副技術室長	三 林 光	技術部技術専門職員

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
	技術部第二副技術室長	太 田 典 幸	技術部技術専門職員
	技術部第三副技術室長	湯 口 実	技術部技術専門職員
	<兼務免>		
令和8年4月1日	大学院工学研究科助教（しくみ解明系領域）	倉賀野 正 弘	大学院工学研究科助教 （しくみ解明系領域） 兼務：MONOづくりみらい共 創機構
	技術部第二副技術室長	村 本 充	技術部技術専門職員
	技術部第三副技術室長	宮 本 政 明	技術部技術専門員
	<定年退職>		
令和8年3月31日		齊 藤 昭 子	希土類材料研究センター 事務補佐員（支援職員）
	<雇用期間満了>		
令和8年3月31日		下 保 知 輝	大学院工学研究科 博士研究員
		TAMBANG MANIK	大学院工学研究科 博士研究員
		上 野 香 織	大学院工学研究科 学術研究員
		柴 田 亜砂美	大学院工学研究科 事務補佐員
		本 間 美希子	総務広報課 事務補佐員
		福 田 永 愛	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		細 川 懐 生	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		松 岡 佑 真	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		山 崎 朗	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		吉 田 光 希	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		永 田 鈴 奈	入試戦略課 事務補佐員

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
令和8年4月1日	<採 用>		
	大学院工学研究科 博士研究員	CHEN HUI	
	希土類材料研究センター 事務補佐員（再雇用）	齊 藤 昭 子	
	総務広報課 事務補佐員	久 慈 鈴 奈	
	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員	阿 部 凌 大	
	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員	宇 高 瑛 斗	
	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員	齊 藤 緑	
	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員	藤 飯 航 樹	
令和8年4月1日	<雇用期間更新>		
		三田村 はるか	MONOづくりみらい共創機構 特定専門職員
		POLTAK SANDRO RUMAHORBO	大学院工学研究科 学術研究院
		宇 井 か な	大学院工学研究科 技術補佐員
		大 谷 景 子	大学院工学研究科 事務補佐員
		加 藤 絵美子	大学院工学研究科 事務補佐員
		佐々木 恵梨菜	大学院工学研究科 技術補佐員
		竹 田 侑 加	大学院工学研究科 事務補佐員
		野 村 未 希	大学院工学研究科 事務補佐員
		藤 田 いぶき	大学院工学研究科 事務補佐員
		本 間 倫 子	大学院工学研究科 技術補佐員
		松 井 奈生子	大学院工学研究科 事務補佐員
		宮 入 直緒枝	大学院工学研究科 技術補佐員
		杉 浦 郁 子	保健管理センター カウンセラー
		村 形 明日希	保健管理センター カウンセラー
		地 主 諒 佑	ものづくり基盤センター 技術補佐員
	杉 浦 美 空	ものづくり基盤センター 技術補佐員	

人 事

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
		高 岩 琥太郎	ものづくり基盤センター 技術補佐員
		田 代 琢 真	ものづくり基盤センター 技術補佐員
		對 島 颯 太	ものづくり基盤センター 技術補佐員
		友 光 完士朗	ものづくり基盤センター 技術補佐員
		原 珠 栄	ものづくり基盤センター 技術補佐員
		山 田 愛 蘭	ものづくり基盤センター 技術補佐員
		橋 詰 奈緒子	ロボットアリーナ 事務補佐員（再雇用）
		池 田 美 香	クリエイティブコラボレーシ ンセンター 技術補佐員
		菊 地 しずか	クリエイティブコラボレーシ ンセンター 技術補佐員
		磯 邊 早 苗	総務広報課 事務補佐員
		木 下 海 美	総務広報課 事務補佐員
		上 西 美 椰	総務広報課 事務補佐員
		藤 平 昌 代	総務広報課 事務補佐員
		小 沼 佳太郎	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		阪 本 薫	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		末 武 優	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		多 屋 早 織	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		原 航 陽	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		本 間 愛 理	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		牧 野 剛 大	総務広報課図書学術情報室 事務補佐員
		小 丸 憲 之	経理課 技術補佐員
		里 見 友 美	経理課 事務補佐員

人 事

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
		福 原 由 莉	施設課 事務補佐員
		浦 田 順 子	入試戦略課 事務補佐員
		柏 谷 真 耶	入試戦略課 事務補佐員
		稲 船 百合子	入試戦略課国際交流室 事務補佐員

訃 報

名誉教授

吉田 豊（享年79歳）

本学名誉教授、吉田 豊 氏は、去る令和8年4月7日(火)逝去されました。

ここに、生前の功績を偲び謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、北海道大学大学院工学研究科鉱山工学専攻修士課程を修了後、昭和46年4月室蘭工業大学助手、昭和58年7月同講師、昭和59年11月同助教授、平成11年4月同教授、平成24年4月に室蘭工業大学名誉教授となられ、現在に至っております。

学内会議

学内各種委員会等の開催

< 2月25日～3月24日 >

開催日時 令和8年3月3日(火)

会議名 第27回役員会

開催日時 令和8年3月4日(水)

会議名 第5回教授会

開催日時 令和8年3月5日(木)

会議名 第28回役員会

開催日時 令和8年3月5日(木)

会議名 第11回教育研究評議会

開催日時 令和8年3月6日(金)

会議名 第9回大学院工学研究科博士後期課程専攻長会

開催日時 令和8年3月9日(月)

会議名 第17回企画戦略会議

開催日時 令和8年3月10日(火)

会議名 第29回役員会

開催日時 令和8年3月11日(水)

会議名 第6回経営協議会

開催日時 令和8年3月11日(水)

会議名 第30回役員会

開催日時 令和8年3月12日(木)

会議名 第6回教授会

開催日時 令和8年3月19日(木)

会議名 第31回役員会

開催日時 令和8年3月19日(木)

会議名 第12回教育研究評議会

開催日時 令和8年3月24日(火)

会議名 第18回企画戦略会議

学内行事

- 2月25日(水) 個別学力検査試験
- 3月2日(月) ネーミングライツ事業実施契約締結(大和工業株式会社)
- 3月6日(金) 合格発表【令和8年度4月入学 理工学部一般選抜前期日程】
- 3月21日(土) 合格発表【令和8年度4月入学 理工学部一般選抜後期日程】
- 3月21日(土) 合格発表【2026年度4月入学 大学院博士前期課程(第2次募集)】
- 3月23日(月) 令和7年度学位記授与式

学外行事

- 3月6日(金) 国立大学協会通常総会(東京都)
- 3月9日(月) 令和7年度第2回大学入試センター運営審議会(オンライン)
- 3月9日(月) ABC国際学会(室蘭市)
- 3月13日(金) JST委託事業『北海道のものづくり地域から楽しく広げる理工系選択』キックオフイベント
- 3月15日(日) 第2回鹿サミット(札幌市)

室蘭工業大学 人物図鑑

室蘭工業大学に所属する教員・職員に
専門分野、業務内容、室工大の
Good Pointなどを聞いてみました。

- ①専門・業務内容
- ②室工大のGood Point
- ③室工大で好きなspot



Part
45

准教授 中田 大将



- ①航空宇宙機システム研究センター、夏も冬も
白老実験場で実験
- ②at homeな組織
- ③白老実験場の木漏れ日

Part
46

一家ひとみ



- ①事務、教員評価に関する業務など
- ②自由に声を上げられる、前向きでオープンな
空気感💡
- ③そらみち（教育・研究1-3号館連絡通路）
日中もおすすめですが夜になるとライトアップ
が綺麗です！

編集後記

- ◆ キャンパスの至る所からフキノトウがニョッキッと顔を出すと、やっとな春が来たなあと感じます。春といえば新入生の入学。「室工大で何かやってやるぞ!」という意気込みが伝わってくる初々しい姿に、学内は一気に活気づく——そんな光景も、この時期ならではの風物詩です。初々しい? といえば、学内にムロびよんのベンチを設置しました。さらりと、ちらりと、何気なくキャンパスにたたずむムロびよんが「かわいい」と、教職員や学生、学外の方から好評をいただいております。工学系大学という少しお堅いイメージの中で、“親しみ”を届ける役割を担うムロびよん。令和8年度も、引き続き、室蘭工業大学の「今」をムロびよんとともにお伝えしていきます。



夜のムロびよんベンチは哀愁漂う、昼は何とも可愛らしい。

(Garoon : 総務広報課秘書広報係、E-mail : koho@muroran-it.ac.jp)

(総務広報課秘書広報係)



室蘭工業大学のキャラクター「ムロびよん」

■編集発行 室蘭工業大学総務広報課
〒050-8585 室蘭市水元町27番1号 電話 0143-46-5008

■印刷所 株式会社日光印刷
電話 0143-47-8308